

---

# 異世界冒険譚（あなざわーるどあどベンチャー）

Riko

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなざわーるとあじへんたちやー  
異世界冒険譚

### 【コード】

N5959W

### 【作者名】

Riko

### 【あらすじ】

女子高生・松浦里菜がある朝目覚めたら、そこは檻の中だった…！？どうやらそこは異世界のプリチュという国。その魔王と呼ばれる王様は、顔を見ると死ぬ、という噂があるらしい。その魔王に顔を見せるぞ！それで死ななかつたら王妃になれ！と無茶を言われた里菜は、死なない自信はあるけど、結婚するのも嫌だ！と、人質になっていた隣国の王子やその従者と一緒になってプリチュ王国を逃げ出すが……。

過去に一部自費出版したことがある作品を完結させようと思っ

て自サイトで書き始めました(したがって重複投稿です)。

## 一、鍵つきの部屋の中の錠つきの檻の中で

ある朝目覚めたら、そこは檻の中だった……。

十秒ほど目をつぶってみた。……開けた。

うーん、見間違いではないらしい。

ちよつとほつぺをつねってみた。痛い。

うーん、夢でもないらしい。

そうだ、それに考えてみれば私って、ほつぺたをつねるって事を  
思い付くって事自体、現実だという証拠だっという持論の持ち主だ  
ったっけ。っていうことは……やっぱりこれは現実なんだ。

私、松浦里菜。高校三年の十七歳。万が一、罪を犯したりし  
ていても、十分少女Aで済む年齢。

なのに、この状態はなんなんだ〜。

頭を悩ませていたら、足音が聞こえた。それとともに一つの、疑  
問解決策が頭に浮かんだ。ここに来る人に尋ねればいいんだ、とい

う、ごくごく単純な解決策。

足音は、ますます近付いて、この檻のある部屋のドアの前で止まった。

ドアの鍵を開ける音がし、　　けど、なんていう嚴重さだろう！  
檻には錠、部屋には鍵。私は余程の凶悪犯なんだろうか……。  
そして人が入ってきた。

……なんだ？おい、私は髪を真っ青に染めた奴なんか趣味じゃないぞ！大体、そんな派手な頭した奴が公職についていいのか？…と、あれ？公職じゃないのかもしれないなあ。

私は今まで、私が悪人ってケースしか考えなかったけど（だから檻の外の人は公務員だろう、と思ったんだけど）、反対のケースも考えられるわけだ。　　つまり、私を檻に入れた人のほうが悪人だってケース。けどうちは身代金目当てに誘拐されるような金持ちじゃないし、金目当てじゃないにしても　　あの後生楽なうちの両親が、子どもをさらわれる程恨まれてるとは思えないし。ましてや私は何かの事件の目撃者とかでもないし、ただ家で寝ただけなのに人質にとられたわけでもないだろうし。……うーん、やっぱり訊いてみるのがいちばん手っ取り早いわ。

で、声をかけようとしたら……閉口してしまった。何故か、というと、部屋に入ってきた人（どうやら食事を持ってきたらしい）がいきなり蒙のすごい早口で喋り始めたから。　　それもどこのなんだかわからない言語で。

何を言われているか、はわからない。けど悪口を言われているのはわかる。人間なんてものはわりかし悪口には敏感なものらしいしね。大体、あの顔を見て、誉めているんだ、なんて言われても誰が信じるもんか！

全く。これで唯一の解決策もダメになっちゃったじゃないか！

あ、だんだん腹がたってきた。勝手に閉じこめられて、理由も教えてもらえず、その上、なんで悪口まで言われなきゃならないんだ

！おとなしく聞いてることはない。叫んでしまえ！

「わけのわからん言葉で人の悪口言わんでくれ！！！」

向こうにもこっちの言葉は通じなかつたに違いないがあまりの剣幕に恐れをなしたのか、その男は檻の向こうに食事を置いて、さっさと退散した。

食事つつたつて、そんな大したものではない。パンらしい固形物と木の器に入った透明な液体が、木製のお盆にのっかっているだけ。

うーん、私、ロールパンの類って焼かないと食べられないんだよね。食パンなら焼かなくても何とか食べられるんだけど。

だからこの液体だけいただこう。多分水だよね。変なもん入ってないだろうなあ。

で、檻の隙間から手を伸ばして器を取って、ごくつと一口。

あら、この水おいしいわ。薬くさくないというか。

もう一口、ごくつ。

それにしても、一体ここはどこなんだろう？

一、鍵つきの部屋の中の錠つきの檻の中で（後書き）

最初の一行は本当は序章なのですが、一行での投稿ができないので、第一章の第一話とくつつけました。

## 二、ありそつになくともある国の

先程の男が、手に何か機械らしき物をのせて戻ってきた。どうやら、私の剣幕に恐れおののいて逃げ帰ったというわけでもなかったらしい。

ふむ。さっきは混乱してたせいか髪の色にしか気付かなかったけど、こいつつてば服装も変だ。ファンタジー系の漫画あたりで兵士が着てるような服だもん。少なくとも現代服じゃあない。……まさか、これが今のはやりだつてことはないよね。私、流行には疎いけど……。

その男は、手のひらの上の、四つの機械のうち、二つを檻ごしに私に渡し、残り二つを慣れない手つきで自分の耳にはめた。そして、どうやら私にも同じようにしろ、と身振り手振りで言ってるようなので、私も両耳にはめた。感じとしてはイヤホンに似てる、かな。イヤホンにひもがついてなくて、かわりに金具がついていて、その金具で耳たぶにとめるようになってる。

「女、わかるか？」

と、その男の声が日本語になって聞こえた。

どうやらこのイヤホンもどきは翻訳機らしい。便利なものだ。こんな物がいつ世の中に出回ったんだろう。通訳さん可哀相に。失業するな。

「おい、女」

……女、などと呼ばれてむっとしたので、ぶすつと答えた。

「何よ、聞こえてるわよ」

「お前は魔だな？」

思わず、一瞬絶句。

「……あんた、頭大丈夫？何をどうしたら、そーゆー滅茶苦茶な発言が飛び出すのよっ！」

「魔じゃないというのなら、言ってみる。どこの国の者か、何故王

子の前に現われたか、どうやってあんな風に突然出現できたか」

「出来るだけ忠実に答えたいわよ。私は日本国ってところの者で、あとは知らない」

「……そのどこが忠実なんだ?!」

「知らないもの、知らないって答えるのが一番忠実でしょうが! 大体、ここがどこかすら知らないつつうのに。ま、言語からいっても、王子なんてのがいるらしいことからいっても、日本じゃないらしいけど?」

「ここはプリチュ王国の王宮の地下牢だ。お前はいきなり中庭にいた王子の目の前に現われた。それで王子の護衛をしていた俺がここに運んだ」

「ああそう。そりゃ御苦労様」

と、私はぶいっと横を向いた。こーゆー事態の起こり得る可能性を、もう一つ思いついたからね。 だけど、わざわざ自分ちの布団で寝ていた私を起こさないように運んで牢の中に入れて、こーゆー大がかりな芝居をやるような心当たりは、ない。

だけど、私がどこかの王子様の前に突然現われた、なんてことを信じてるって方が

でも、現実・らしい。

あつうっもう開きなおってやる!(もう既に開きなおってる気もするけど)

「おい、女」

「何よ、女女ってうるさいわね、男。確かに私は女だけど、ちゃんと松浦里菜っていう固有名詞があるんだからねっ!」

「まつうらりな? 舌を噛みそうな名前だな……。不便このうえない」  
「呼ぶ時は里菜でいいの! 松浦は家族名称なんだから。もっとも家族名称で呼ぶ人の方が、日本じゃ多いけどね」

「ややこしいな。 おい、りなとかいうやつ。お前は、そんなのがあるわけがないとすぐわかるような国名でも、一応答えた、ということは、自分が魔だと素直に認めるつもりはないんだな?」

「魔じゃないんだから、素直に認められるわけないでしょうが！それに日本っていう国だってありそうになくともあるんだから仕方ないじゃないの！」

大体、プリチュ王国なんていうの方が聞き覚えないわよ。

「お前があくまでそういう態度をとるのなら、王の御前に連れていくよう、命ぜられているのだが」

「あっほんと？私、王様って会ったことないから会ってみたい」

「……おい、ロツフ王だぞ？人なら誰でも、その顔を見るだけですぐさま死に至り、魔ですらひれ伏すとされる、ロツフ王だぞ？

この世界の者で知らぬ者など、生まれたばかりの赤ん坊くらいのものだぞ」

「……私知らないよ、そんな王様」

「……お前、赤ん坊か？さもなければこの世界の者でないか」  
テアーリ

へっ？今、この世界とテアーリってのが二重奏になって聞こえたぞ。ってことは、「この世界」イコール「テアーリ」っていうもの、な訳？……私の感覚じゃ「この世界」っていうのは……えーっつ。

「ちよつと待った！ここつてもしかして地球ですらないわけー？！」

### 三、松浦里菜っていうただの女の子が

結局、王様と御対面することになった私は、その番人らしい男に、両手首を合わせて縛られ、体と両腕もまとめて縛られ……つまりやたらと嚴重に縄でぐるぐる巻きにされた。おまけにお札らしきものまで首からかけられた。　　どうやら、私が魔力でも使って逃げるんじゃないか、と思っっているらしい。

それでやっと檻と部屋から出してもらえた。（そうしたら部屋の木製の扉にもお札がかかっていた……）出たところで更に目隠しをされ、階段をのぼらされて通路をやたらと歩きまわらされたあと、やっと止まって目隠しを取られた。と、そこは両開きの扉の前だった。

男が叫んだ。

「日本という国の松浦里菜だと主張するものを連行して参りました！」

木製の、いかにも重そうな扉がこちら側に向かって、ぎぎぎっと開く。

見ると、扉一枚ずつに緑髪の兵士（らしき人）が一人ずつついてそれを押していた。うーむ、こういうのもドアボーイというのかな。中に入る、というより入れられると、そこは広い部屋で、奥の方が薄いカーテンで仕切ってあった。カーテンは天井から床まで、壁から壁まで、余す所なく張られていて、その向こうは全然見通せないんだけど、影は見える。どでかい椅子らしきものと、それに坐っている男がでんとシルエットを作り、その脇に並サイズの椅子の影もある。

こんなことを見ているうちに、その番人に押されて、カーテンから五メートル位のところで止まらされた。えーと、気分としては正座でもしたいトコなんだけど、そういう習慣なさそうだしなー。妙なことすると、何でも魔扱いされそうだし。ここは一つ、向こうの

言うところに見ましようか。

ふと気付くと、右手の壁際にカーテンから頭だけ出して、じつとこつちを見る青い髪の男の子がいた。小学…六年生くらいかな？なかなかかわいい子だなあ、うん。

あんまり興味ありげにこつちを見るんで、思わずテレて、ひきつり笑いをしてしまった……。そしたら向こうも少しにこつとして、カーテンの中に顔を引っ込めてしまった。そして、トトツと走って行って並サイズの椅子に腰掛けると、どでかい椅子に坐っている男と、一言二言言葉を交わした。

えーと、私は王様に御対面しに来たんだから、その男はロッフ王なんだろうな。その隣に坐ってるんだから、あの男の子が、私がその前に現われたって言う王子様なのかな。

そんなことを考えていると、その、多分王だろうと思われる人が口を開いた。

「御苦労。下がってよろしい」

私の隣の男は一敬礼して、まわれ右をして歩いて行った。そしてドアがギギギツと音をたてた。きつとまたドアボーイがドアを押しているんだろう。さらに少しすると、ドアは再び閉じたようで、足音は完全に消えた。

うーん、置いてかれてしまった。友好関係にあるとはとても言えない相手だけど、唯一会話をした人間だからなー、いなくなると心細い。うーん、一体どうしたら良いんだろう……。

悩んでいたら、カーテン（多分、御簾と似たような働きをしてるんだろう。偉い人とそれ以外を隔てる、という……）の向こうの男が言った。

「わしがロッフ王だ」と。

うーんやつぱりこの男が王だったか。顔を見ると死ぬとかいうロッフ王ね。案外、余程のぶ男で、顔を見られると怒り狂って相手を殺すんだったりしてね。ははは。まあ、それにしても王子様らしい

子は可愛かったけど。

「魔よ、私の名において答える。お前の目的は？」

「王？陛下って呼ぶべきなのかな……ま、いいや。ロッフ王、その前に私が訊きたい。何だって私が魔だと言っんですか？」

「王子の（と隣の子の方を少し見て）目の前に突然出現するなんて芸当が、魔以外の何に出来る？」

「一つお訊きますが、この国ってテレポートとかワープとかっていう概念ありますか？」

「てれぽおと？何だ、それは」

「私の世界で言われてる、二空間の物体を交換させる能力ですが、瞬間に移動できるっていう便利な力です」

「その力をお前が持っている？」

「いえ別に」

「……」

「ただ、突然現われたからといって魔とは限らない、と」

「はん。どっちにしろ、そんなことが出来るのは魔だろうに」

「まあ、エスパーが魔女と言われるってパターンは小説とかによくあるけど、でも……」

「私は、そんな講義を聴くためにお前を呼んだのではない！お前は素直に正体と目的を吐けばいいのだ！！」

「だから私は松浦里菜っていう者で！いつの間にかここに来てたんだから、そもそも目的なんか持ちようがないでしょ！！」

「日本？ふん、そんな国がどこにあるというのだ？」

「そんなこと言ったって、在るんだから仕方ないでしょ！大体聞いた限りじゃ日本でないのみならず、地球ですらないみたいだから、ほかの惑星上に知らない国の一つや二つあっても当然でしょうがっ」

「うーん、そうなんだよな！。ここが地球じゃないなんて、信じがたいんだけど、あの番人「ちきゅう？何だそれは」つつつたんだよな！。地球って単語だけ翻訳機が変換しないなんてこともないだろうしなあ。それにこの国の人ってみんな髪の毛青とか緑みたいなん

だよ。知ってる限りじゃ地球上にはそういう髪が普通のところってない筈だし……。

そんなことを考えていたら、王はもつと打撃的なことを言った。「テアリ以外のどこに人が住めるといふのだ！惑星<sup>ホッ</sup>なんて、ただの小さい石ころではないか！」

お、思わず頭痛が……。手を額にやると、あの可愛い王子様が心配して訊いてくれた。

「あのお、大丈夫ですか？」

「ん。ちよつと、この国の文化程度がわからなくて、くらつときただけ」

と、私は答えた。本当だよ、全く。何だつて同時言語翻訳機なんて便利な物がある国で、星が石だなんて思われているわけ？よつぽど天文学だけ発展が遅れてるのかな。あ、でも服装とか建物とかを見ても文化程度低そうだしな。……んじゃこの翻訳機は何なんだ。

「トーレ王子。そんな者を心配することはない。それは魔なのだ。もつとも、魔と通じたかどで投獄されたければ別だが」

トーレ、と呼ばれたその王子は、口を閉じた。何か変な親子

……。

「さあ、魔よ、素直に目的を吐いてしまえ。どこの国に頼まれたのだ、イサジアかラーサか……それともハーレ、とか？」

王子の体が、びくつと震えた気がした。何だろう、気のせいかな。しばらく間をおいて、王が再び言った。

「いいかげんに何も知らないふりはよしたらどうだ？まだしらをきるつもりなら 顔を見せるぞ」

「見せたら何だつつうのよ」

「……」

「死ぬとか何とかあの番人が言ってたけどねっ、顔を見ると死ぬなんついたら、どっちかっていうとあなたの方が魔なんじゃないの！」

「そうだ」

王はあっさり言った。

「え…」

「私は魔だ。だから人は私を見ると死ぬのだ。このトール以外  
は」

「何だ。じゃあんなに可愛いのにトール王子は魔なのか。残念だな  
あ」

「トールは人間だ。憎らしいことに」

「へっ」

「トールは人間だ。なのに私を見ても死なない。だから私の息子に  
したのだ」

三、松浦里菜っていつただの女の子が（後書き）

思えば第1章辺りって高校生の頃書いたのです。うはあ。

#### 四、プリチュ王になりたくないプリチュ王子トールと

ガチャツと部屋の鍵が開いて中に入ったところで目隠しと体に巻き付いている縄を解いてもらえた。

ガチャガチャツと檻の錠を開けて、私を中に入れ、ガチャガチャツと錠を閉めたところで番人らしい男が言った。

「手を出せ」

それで檻の隙間から手を出して、両手首を縛っていた縄を切ってもらった。

うー、縄が結構きつかったからな、痕になってる。痛いったら……。

番人らしい男は、部屋から出て鍵を閉めると、そこで番をしてるらしかった。

どうやら本当に番人になったな。

結局、話が進展しないので、私を連れていった男がもう一度呼び出されて、私をここに戻したってわけなんだけど……。

うーん一体どういふことなんだろう?? 私はどうして他の星にいるんだろう、って事じゃなくてね。私のことは考えたってきつとわからないだろうから、とりあえず置いといて、あの王子様と王様の事。

どーも台詞から言うと、あの王子は養子みたいなんだけど、かわいくて養子にしたわけじゃなさそうだしなー。憎らしいって言うってたもんね。憎らしくて養子にするっていうのは、一体どういふことなんだろう?

うっうっうっ元の疑問符に戻ってしまった……。この世界の知識がないから考えにくいのかなあ……。

と。外で足音がしたような気がした。耳を澄ますと 確かに。

それから、番人がその新参者と何か議論を始めたようだった。小

声で話してるんだけど、たまーに番人の興奮した声が聞こえてくるんだよね。「しかし！」とか「ですが！」とか。

しばらくすると声はおさまって、部屋の鍵を開ける音がした。

どうやら新参者は私に会いにきたらしい。誰だろう。今の状況を多少なりとも変化させてくれる人だと有難いなー。

すると、番人の「どうぞ」の声の後に入ってきたのは、トール王子だった。

「トール王子?!」

叫ぶと、すつと番人が入ってきて、檻の隙間から剣を持った右腕を入れて、刃を私に向けて、言った。

「大声を出すな。トール王子はお前との会談を望まれている。

だが、王子をどうにかしてみる、俺のこの剣が黙っちゃいないからな！」

何かこう、時代劇あたりで聞きそうな台詞だな。まあ口答えをしてみる。

「どうにかたって、檻ごしでどうしろっていうのよ」

「魔であるお前なら、檻をものともせず何かをするかもしれないだろう」

「檻をものともせず何とか出来るなら、剣つきつけてるお宅なんて、とっくの昔にどうにかなってると思わない?」

「……」

王子がくすくすつと笑って言った。

「もついいよ、ムルー。どう考えてもあちらが正しいよ。大体、

僕にはお前や王の言うように、この人が魔だとは思えないけど?ね、松浦里菜さん?」

やあつと私のことを魔扱いしない人が現われたので、当然私の態度もやわらかくなる。

「里菜でいいです、王子様」

「そうですか?じゃ、僕のことトールって呼んで下さい」

「でも、トールだなんて呼ぶと、許してくれなさそうな人がそこに

いるけど?」

と私は言った。

「構わないよね、ムルー?」

「……王子の御命令とあらば」

ムルーという名らしい、その番人は、しぶしぶそう答え、王子が剣をちらつと見ると、しぶしぶそれをしまった。

王子は続けて言った。

「それに僕は、貴女に仲間になって欲しいんだし」

「仲間?何の?」

「この国を脱出する、です」

「脱出?! ったって、あなたこの国の王子なんでしょう? だったら何で逃げる必要が……。あ、それにその前に」と私はムルーを見て言った。

「この人、あなたにすごく忠実に仕えてるみたいだけど、その前にあの王に仕えてるんでしょ? そういう話して大丈夫?」

「大丈夫じゃなきゃする訳ないだろ」

うっムルーに逆襲されてしまった。そりゃそのとーりなただけど……。

「大丈夫なんです。表向きはムルーは王に仕える身として、僕に仕えている訳なんです、実際は王に仕える以前に僕に仕えてるんです」

「ん???」

「どういう事だ?」

「ま、ちゃんと説明しますよ。どうやら本当にこの事ご存じないみたいですね」

それで、やっと私は、ここの知識を多少なりとも得られることになった。

「僕と王が本当の親子じゃないのはもうお気づきでしょう?」

「ん、まあおぼろには」

「僕はもともと、隣国の、ハーレ王国の王子なんです。 七年前

に、ここプリチュ王国のロツフ王が突然戦争を仕掛けてくるまでは、何分、ハーレは小国でしたので、大国プリチュの突然の攻撃に耐えられるわけもなく、そのうえプリチュは魔王ロツフを迎えたばかりで勢いにのってましたので、ハーレ王国はあっさりと敗退しました。そして、ハーレ王城にロツフ王がのりこんできました。

城の者は皆、王が来ると目をつぶるなり顔をそむけるなりして、死から逃れました。だけど僕は全然目をつぶらなくて、でもまるで何ともありませんでした。それでプリチュ王ロツフはハーレ王に向かつて言ったのです。

『ハーレ王、取引をしよう。もし、この王子を跡取りとしてくれるのなら、全ての者の命ばかりか、貴殿が王として存在することすら許そう。勿論、毎年何かを納めてはもらうが』

と。要は植民地になれ、ということですが、それをのむ以外に国民を救う手立てはありませんでしたので、ハーレ王は目をつぶったままうなずきました。そしてロツフ王は、約束通り国民にも勿論王にも手を出さず、僕を連れて引き上げました」

うつむ…。何てゆーか…えっとお…。

「僕の身柄と引き替えに国が助かった、と言えば聞こえはいいけど実際にはそれは、いくらハーレの国力が充実しても、僕という人質がいるために、ハーレ王国は植民国としての生活を余儀なくされている、ということですよ。…そんなことには耐えられない！」

子供にしてはやけに淡々と、他人事のように話していた王子は、そこで初めて押さえていた感情を爆発させたようだった。

私が入っている檻につかまって、ひざをつき、うずくまるようにして泣いている。

ムルーは、泣いている王子をどうしたらいいかわからないようだった。私にもわからない。でも。。。

「ハーレ王国の国力は、この国、プリチュとやらを打ち倒せるほどアップしてるの？」

と言ったら、トーレは顔を上げて答えた。

「はい！ハーレのみんなはプリチュに税を取られてもめげずに働き、貯えはかえって七年前よりも多いですし、戦力も　これは、七年前さっさと敗退した為に、ほとんど無傷だったことが幸いしたんですが　かなりアップしてるのとのことですから、僕という要因さえなければ必ず勝てます！！いざとなれば、この命を土に還してでも……！！」

ふう。七年前、魔王一人のために国をあげ渡した人々が、いくら戦力アップしたからといっても、勝てるのかなあとは思っただけ……黙ってるって、実際に自害でもしそうな勢いだもんな。ここはひとっ……。

「わかった」

「えっ」

「やってみよ。このこと、全然わからないし、何故お宅が私を仲間を選んだのかも全然わかんないけど」

「あ、それは、あなた色々な事知ってるみたいだから、絶対この脱出行の力になってくれると思うたし、悪い人じゃないと一目見た時から思ってたし、大体、僕の目の前に現われたんだから、きつと運命の巡り合わせだと思っただし、　何より、いずれ死刑の身じや手伝ってくれざるを得ないでしょう？」

……何だって？

「死刑って……どーして?!」

「どーしてって、魔と言われた者の運命ですよ」

あー、ジャンヌ＝ダルクなんかもそうだったな　。

「じゃ、どうして魔王は死んでないわけ？」

「だって　死刑を決定するのは王ですよ。魔王に誰が死刑を宣告するんです？」

「……」

うっん、それは難しい問題だ。

「とにかく、なるべく早く実行に移したいんで、計画をたてないと

……」

王子がそう言いかけたらムルーが口を出した。

「王子！そろそろ帰られないと、王が……」

「あ、そうだね。じゃ、里菜、また来ます。あつと、ムルー。里菜にこのこと教えてあげてよ。頼んだよ」

そして、王子は走り去った。

しばしの沈黙の後、ムルーがいよいよという感じで口を開いた。

「何か聞きたいこと、は？」

「え、そりゃ山程。でも、そうだな、最初に訊いところかな。

……ムルー、ハーレ王国がプリチュ王国に勝てると思う？」

そんなことを訊くとは思っていなかったらしく、少々驚いたような顔で、ムルーは私の目を見た。で、私は言った。

「正直なところをさ、言つてよね」

「そう、だな。本心で言うとな勝てない、と思う。……国力が増そうと戦力が増そうと。七年前ハーレが勝てなかったのは、そのせいじゃない。敵の前で王自ら目をつぶってしまうような国が、

どうして勝てるというんだ？……そう、一番の敗因は精神力だ。そしてそれは七年やそこから身につくものじゃない」

ははあ、やつぱりムルーもそう思ってたか。王子がハーレの国力について熱弁してた時、王子の後ろでなんか渋い顔してたから、おや？と思つてたんだよね。

「私もそう思う。でも『自分さえいなければ』なんて思つてる王子見てると、たとえまた負けるとしても、いつしよに脱出したいと思つちゃうな。わけのわかんないうちにわけのわかんないところで殺されるのもやだしね」

ムルーは、唇のはしを少しゆがめた程度の笑みを浮かべて、そして言った。

「しよっぱなつから思つてたんだが、お前は外見も中身も何か変わった奴だな。まあ最初は魔だからだろうと思つてたんだが……」。

中でも気の強さは……凄いな」

凄いつて言われると、一体どう答えたものやら。

「えーと、まあそのー……。うん、気の強さには自信あるんだ、私」  
何たつて昔、痴漢さんにすら気が強いなーと感嘆(?)された程  
の人間ですからね、私は。(何やったかかっていうと、ただ、声出す  
と殺すぞつて脅されて、首絞められかけたんで、反対にカッター出  
して脅したつてだけなんだけど……)

「だけどな」

ムルーが言った。

「だけど俺は思うんだ。もしかしたらつてな。 五歳の時、無意識に目を開けていて死ななかつたトーレ王子は、十二歳の今、意識して目を開けていても十分王と渡り合える。それだけの精神力の持ち主がハーレ王国に戻ったら、多少なりともハーレの国民に影響を与えるんじゃないか。そうしたら、もしかしたら……つてな」

ムルーの目は夢見る目だった。

## 五、地下牢・プリチュウ王城・プリチュウ王国を脱出すべく

トーレ王子にはとっても素直なムルーは王子の言いつけを守って、ちゃんと私の質問に、わかる範囲で答えてくれた。もっとも私に対する態度が軟化したのは、私のことをどうやら魔じゃないらしいと思いなおしたせいもあるようだった。

とにかくそのお陰で、翌日トーレ王子がまたもやこっそり降りてきた時、何とか幼稚園児程度にはこの世界のことを知っていた。(でもこの世界には幼稚園ってなさそうだけどね)

「里菜、どうですか？快適、の訳ないだろうけど、元気ですか？」

「うん、まあね」

さすがに昨日一日御飯ぬいたら、お腹がとーってもすいたんで、食事に出されるやけに固いパンを、一生懸命噛んで水で流し込んだ。

味も素っ気もない食事の仕方だけど、とりあえずエネルギー源も取ったから、元気！

まあ、実を言うとき、おトイレずっと我慢してたら、今日の夕方頃おなか痛くなっちゃったんだけど、もうどうしようもない！  
って時に仕方なくムルーに聞いたら、端の石が一つ外れるようになっていて、そこに排泄するものなんだ、ということがわかって、ムルーにしばらく部屋の外に行ってもらって、事は解決した。ははは……。

「じゃあ今日から脱走計画たてに入っていていいですか？」

「どうぞ」

「じゃ、何か案ありますか？」

思わず絶句。

「案あるかって、だって私よりあなた達の方が内情に詳しいでしょうが！」

「貴女が来る前にも、色々二人で考えたんです。でも全部ダメ。」

この城は水も漏らさぬ警備網が引かれているので。だからここは、レポートなどという奇想天外なことを知っている貴女に……」

奇想天外だったって、レポートなんて既に一般的な言葉だもんな、地球では。語だけはね。

うーん、しかし逃げ方ねうーん……。私が思い付くような事、色々考えたっていう王子達が気付いてない筈はない、と思うけど、とりあえず思い付いたことを片っ端から言ってみようかな。

「えーとね、さっきムルー、あのお手洗いの下水、海に流してるって言ったよね」

「ああ」

「んじゃこの城って海に近いんだ」

「ごく近いです。えっと、海に面して崖があって、その崖の上はこの城が立ってるんです。で、この地下牢は、その崖の中にあるわけです」

王子が答えてくれた位置関係を頭の中に思い描いてみる。

「そうするとなえっと……崖の方も警戒は厳しい？」

「いや、全然」

ガクツ。余りにあっけないムルーの答えに体の力がぬけたぞ。

「じゃあさ、ちょっと危ないかもしれないけど、崖っ淵を縄でも垂らして降りて、海から逃げたら？」

おおっと。問題外の意見だったのかな？言うや否や、何を馬鹿なことをって目で見られた。実際、

「何を馬鹿なことを」

とムルーに言われた。

「え、何。ひよっとして海に鮫でもいるとか？」

思わず尋ねたら尋ね返された。

「さめって何だ？　そうか、そう言えば国は大ざっぱに説明したけど、流浪の民は説明してなかったな。国は覚えてるか？」

うーん、本当に大ざっぱな説明だったからなー、ほとんど覚えてないけど、えーと……。

「えつと確か、大国が三つでプリチュ、イサジア、ラーサ。小国がハーレにオルファに……」

「クラブにサウニア、ウツディーラハサ、ロスエン、カラಂತ、エシヤム、ボーグディアグ、で九つです」

と、王子が助け船を出してくれた。

「おーすごい！よく覚えてるねー」

私も地球上の国なら十二位言えると思うけどね。えつと、日本、アメリカ、ロシア、中国、韓国、北朝鮮、イギリス、フランス、ドイツ、スイス、イタリア、スペイン……。

確か、私はトーレ王子を誉めたんだけど、何故かムルーが得意だった。

「当たり前だ。何せ、俺が八年も仕えてる王子なんだぞ」

そうか。そうだったけね、ムルーは。何が、そうか、ということ、これも『表向きはムルーは王に仕える身として、僕に仕えている訳なんです、実際は王に仕える以前に僕に仕えてるんです』という台詞がわからなくて、昨日ムルーに聞いたことの一つ。

元々ムルーは腕の良い傭兵で、戦争とか盗賊退治とかいう段になると高額で働いてたんだって。ところが八年前、世界中が一時の平和状態にあつて、ムルーが（どうするか…）などと考えながら旅をしていて、ハーレ王国の近くに差し掛かった時。

その辺は、一帯草原だった。歩いているとキヤーキヤーワイワイと騒いでいる一群の人間がいた。服装やら持ち物、馬車から見て、貴族が遠出をしてきたようだった。

（ふん！貴族か）

俺がそう思つて通り過ぎようとした時、風が吹いて、布が飛んできた。それは、その一行の中で唯一の子供で、故に大人達が食事の支度をするのを手伝えず、一人でぽつんと座っていた男の子の、日

よけの布だった。

俺がそれを拾うと、その男の子は走ってきて、言った。

「おじちゃん！ありがとう！」

貴族の子が、大人達が誰も気付かなかったとはいえ、自ら取りにきたのが印象的だった。

貴族の子が、見るからにただの旅人とわかる俺に、礼を言ったのが印象的だった。

そして何より、人を真っ直ぐに見る澄んだ綺麗な碧い瞳が印象的だった。

俺は、思わずしゃがみこんで訊いた。

「ぼっや、名前は？」

「トーレ、だよ！おじちゃんは？」

訊き返されるとは思ってたなかったので、俺は少々戸惑いながら答えた。

「ムルーだ」

丁度その時、やっとその子がないのに気付いたらしく、大人つまり下女の一人が声をあげた。

「王子様！どちらですか？」

そこは馬車の陰になっていて、下女の側からは見えなかった。

「はい！今行くよ！」

その子は返事をし、

「ムルーおじちゃん！またね！」

と言って、日よけの布を頭にかぶって走って行った。

またね、というのが印象的だった。

それに、ただの貴族の子でなく、王子だったということが、先程の印象を深めたのは当然だろう。

俺は、瞬時にその子に仕えることに決めた。

その場所と、王子の年とから考えて、ハーレの王子だと確信できたので、俺はハーレ王国に向かって歩き始めた。

つねづね俺は、そろそろ世界は統一されなくてはダメだ、と思っ

ていた。こんなに争い事ばかりしては、どの国も自滅してしま  
う、と。 まあ戦いがなくては生きていけない傭兵の台詞じゃな  
い、とは思ったが、ね。

俺は、それまでけっこう色々な王に会ってきたが、どの王も世界  
を統一するに足る人物とは思えなかった。だが、この王子は、育っ  
たらそれらのどの王とも違う王になる！と思った。そしてその成長  
の過程をこの目で見てみたい、とも。

二時間も歩くと、ぼちぼちハーレ王国に属する村落があちこちに  
見えてきた。どの村にも寄らず、更に四時間程歩くと、ハーレ市を  
囲む石壁の、西大門に出た。

当然番兵にとどめられ、俺は推薦状を見せた。《里菜注。推薦状  
というのは、契約状態が終了した時、つまり争い事にケリがついた  
時に、契約した主（村長とか領主とか、王だったりするそうだが）が、  
よく働いてくれた傭兵に対し、報酬とともに渡すもの、らしい。そ  
れをもらった傭兵は別の所へ行く時、それを見せて腕と忠義とを信  
用してもらい、雇ってもらう、というわけ。その男がスパイだった  
りすると、推薦した者が睨まれるから、滅多な人はもらえないとか  
その、もらうのが難しい推薦状をムルーは十一も持っているらしい  
《番兵は早馬を駆って城の王に取り次いでくれ、俺は城下を一時間  
ほど歩いて、そして城で王と会った。

王は言った。

「傭兵ムルー、だな？ 推薦状の文句を見るまでもなく、お前の噂は  
聞いていた。 若いのに大層な腕の剣の使い手だと。が、一体何  
用だ？ 知っているとは思うが、我が国は現在どことも鬭争状態には  
ないし、しばらくは戦争になりそうな気配もない。内紛もないし、  
今のところは盗賊の害もない。傭兵とは争いの中でのみ働く者であ  
ろう？ 一体何用だ？」

もう知つての通り《とムルーは私に言った》この一年後にプリチ  
ユ王国との戦争、というか、プリチュ王国の侵略が始まったわけだ  
が、その当時プリチュの王はまだロツフ王ではなく、そんな兆候は

微塵もなかった。

俺は王に向かって言った。

「ハーレ王、俺は傭兵をやめたいと思う。そしてこの国に仕えたいというより、この王子に」

「ちょっと」

と私は言った。

「ムルって王様に対してそーいう言葉遣いするのー？」

「当たり前だ。王と俺は対等な立場じゃないか。俺は俺の能力を売り、王がそれを買っつていう、な」

「……理屈は、わからなくも、ない、けどねえ……」

でも、能力を商売物、王をお客とするなら、「お客様は神様です」っていうんじゃないのかなあ……。

「砂漠を出て以来、心から仕えたい、と思ったのは、トーレ王子だけだ。王子以外の誰に敬語なんか使うものか！ もっともロツフ王は別だがね、心服してるふりをしてるから」

「それは 我が国にとっては有難いが、どういうことだ？しかも王子の、とは？」

「別に。この王子が気に入っただけだ」

王はしばらく俺を見ていたが、割とあっさり言った。

「よかるう。但し、王子に仕えるとはいえ、一応表向きは我が国の兵になつてもらっぞ。でないと給料も払えないし、な」

「ああ、俺もそれは当然と思う。王子に仕えるということは、結局この国に仕えるということだし……。だが俺の忠誠はあんたにやらんぞ」

王はにやつと笑って言った。

「わかった」

これは後で聞いた話だが、ハーレ王はそのあと、大臣に言われたんだそうだ。

「王、忠誠も誓わぬ者を城中にあげたりしては……」

と。王は答えて言ったそうだ。

「いいではないか。あの男は、今までどんな主にも忠誠を誓ったことがないそうだ。だが一度たりと主を裏切ったことはない。忠誠を誓いながらも逃げだす傭兵、どころか兵士も多い昨今、ああいう男の方がかえって良いとは思わぬか？ あのはつきりした物言いも私は気に入ったが」

とね。あの王は、今時珍しい、話のわかる権力者だったよ。

そして 次の日。俺は遠出から戻ってきた王子に引き合わされた。二人だけになった時、王子が俺に言った言葉が、また印象的だった。

「ね、またねって言ったでしょ、ムルー」

俺は王子に絶対の忠誠を誓った。

そして、それからの一年で、俺はトーレ王子に仕えたのは本当に正しかった、と悟った。魔王にも対抗できるとは予想以上だった。

だが王子は魔王に連れ去られてしまった。

ハーレ王国は建て直しに取りかかったところだったが、俺はかまわず、誰にも断わらず、単身プリチュ王国に向かった。俺が一年間ハーレ王国の兵士だったことは、城内の一部の人間しか知らないことだったし、平和な時期に傭兵が一年位行方不明になるのはよくあることだから、特に不審にも思われず、プリチュ王国に入ることが出来た。

俺は、そろそろ安定した生活を送りたいから、と言い、プリチュ王に偽りの忠誠を誓って働き始め、そしてやつと最近、王子の警護の仕事が入ってきたところだった。もつとも、お前が現われた時、丁度王子の護衛に俺がいて、俺がお前をここまで連れてきたせ

いでそのまま牢番をさせられることになって、王子の警護の仕事は消えちまったがな！

そう話をしめくくるとムルーはぶいつとそつぽを向いた……。あれがなかなかかわいくてねー。大体、最初やけにつつかかかってきたのが、王子といるのを邪魔された腹いせもあつたんだと知ると……実に可愛い。二十八の男とはとても思えなかつた。

その、二十八の男とは思えない奴が言った。

「流浪の民とはつまり、そのどこの国にも属してない奴らだ」

「……ジブシーみたいなもんかな……？」

「じぶしーというものは知らんが　つまりだな！」

ムルーが苛々してそうな声でそう言うと、トーレ王子が後を続けた。

「流浪の民というのは、定住地を持たず流離う人々のことですが、ただの流離人じゃなくて、民族の代表といえますか　そういったものでもありません。その種類には、砂漠の民・アビリ、草原の民・ブテス、湖の民・ミウミウ、山の民・トンム、海の民・ドニート、空の民・フィルアがあつて、初めに言った二族以外はほとんど伝説上のものとはなっています。やはり彼らの及ぼす力は大了たものです」

「は？」

「ちよつと頭が……。えつと……。あ。」

「民族の代表つていうのは？」

「えーと……国などが生まれる前から人間は世界中にいたわけで、その時代の居住地域とかで、肌とか髪の色とかが少しずつ違うんです」

「あ、地球の黒人とか白人とか黄色人種とかと同じ、かな」

「ええ、多分そうです。で、当時は全ての人々が流浪生活をしてい

たんですが、少しずつ定住していき、国を作り……残った未だに定住していない人々が、流浪の民、と呼ばれています。彼らは全く他の民族と交わっていない、純粋な血を持っているので民族の代表と言えます」

「はあ、人種のモデルケースってわけか。そう言えば私も黄色人種・大和民族のモデルケースだけだ。」

「ちなみに僕は、いわれでは全部の民の血をひいているそうです。でもまあ、大体はハレ国民もプリチュ国民も草原の民>プテスクの出ですね。ムルーは……砂漠の民>アビリ<だっけ？」

「はい、そうです」

「こんな説明で、大体わかります？」

「ん 一応ね。で、その流浪の民がどうかしたわけ？」

「海には海トリートの民がいる」とムルーが言った。

「えーと、ほとんど伝説と化している民族だよ、それが？」

「海に関することは、彼らと契約しなくちゃいけないんだよ！」

「……伝説上の民族と？」

「及ぼす力は絶大、と言ったでしょう。実体はこここのところ認められませんが、力が活動しているのは確かなんです」

どこに確信持つてるのか知らないけど、古代でよく見られる訳のわからない信仰じゃないのかな。実を言うと私は、あの王が魔王だというのにも疑問を持っている。だって誰かがあの人を見て死んだのをこの目で見たわけじゃないもんね。 といつても、私、現実主義者なわけじゃないんだけどね。だって別に無神論者じゃないし、あんまり関係ないような気もするけど、神話とか大好きだし。ま、とりあえず……。

「あかさ」

「ちよつと芝居がかって、牢ごしに二人にずっと近付いてほそつと言った。」

「魔王と海の民とどっちが怖い？」

五、地下牢・プリチュユ王城・プリチュユ王国を脱出すべく（後書き）

ちなみに3大国の名前は、花の名前がもたっています。

プリチュユとイサジアはひっくり返すとわかります。が。ラーサだけは何の花をどうやってこういう名前になったのかさっぱり覚えていません……。

## 六、脱走計画を考えた。

魔王と海の民とどっちが怖い？ 私がそう言うてから、しばらく経っていた。だのにまだ二人とも、

「うーん」

と考え込んでいた。だから私は言った。

「つまりさ、現実的に見てどっちの方が危険かってことだよ？急いで逃げないといけないんだし、他に逃げ道が見つからないなら…」

…」

「別に急がなくてもいいんだぞ、我々は。ただお前が死刑にされるってだけだ」

とムルーが、以前ならマジで言っただろうけど、今はからかって、言った。で、私も言い返した。

「おーや。そう長期間、脱走計画を練っているのを魔王に隠しおおせるとは思えないけどねー」

「……」

やーい、黙り込ませてやったぞ！

そして王子が、静かに言った。

「……里菜の言う通り、そう長く隠しおおせるものではないでしょうね。それに僕は急いで逃げたい。急がないと……」

ん？急がないと、何なんだろう、と思ったんだけど、王子はそのまま台詞を跡切らせ、次に口を開けた時には、

「海をとりましょう」と言った。

ゴクツ。ムルーがツバをのみこんだ。

「ただ問題は ハーレ城市もプリチュ城市も海の民と契約なかったから、僕泳いだことないんですよね」

うつつ 私もあんまり泳げないしなあ、うーん……。えつまさ

かっ

「ム、ムルーは?!まさかムルーも……」

「俺は泳げる。前に海の民と契約のある街に雇われたからな」

ほっ。よ、よかったあ……。

「ムルーが泳げるなら、泳ぐの手伝ってもらえるし、人間の体は浮くようになってるそうだから、大丈夫でしょ。」

それよりどつちかかっていうともっと問題なのは……何処から海に出るかとか、崖の高さとか、岸までの距離とか……」

「あ、前々から脱走計画のために書庫から城の設計図とか手に入れておいたので……」

そう言つてトーレ王子は懐から古そうな紙を取り出した。その紙は数枚束ねてあつて、色んな方向から見た城の絵らしきものとか、城の断面図らしきものとか、平面図らしきものとか色々あつた。

とりあえず全部に目を通したけど、

「わかるか?」

というムルーの問いに思わず、

「わからん」

と答えてしまった。

「図はわかるけど、書き込まれてることがわかんないよお」

で、かなりの時間をかけて王子とムルーに一々訊いて、位置関係とかをざつと理解した。

えっと、そうすると、崖から海に出るためには、なるべく見つからないように地上に上がり、一階の窓から縄を垂らして崖を降りていかないといけないわけか。うーん、この崖、かなりありそうだなあ……。

「ムルー、この崖って高さどのくらい?」

「えーと10テイってとこかな」

「……1テイってどれ位なわけ?」

「ああ……俺の肩ぐらいだ」

「ムルー起立!」

と言つてムルーを立たせ、私も立つ。

「えと、ムルーの肩は私の目くらいだから、大体150センチメートルか。つてことは10ティは15メートル……」

うーん、校舎の一階分が4メートルぐらいと考えると、大体四階分つてことか。うちの学校の四階建て校舎の屋上つて立入禁止になってたよな。立入禁止になるくらいの高さ、ね……。

別に高所恐怖症ではないけれど、その高さを縄だけを頼りに降りていくのかと思ったら、少し寒気がして、思わずこわこわと崖側から見た城の絵を眺めてしまった。

あ、あれ？ 絵に、さっきは気付かなかったものを発見した。

「王子、ここの黒いの何？」

崖の途中に一つ、小さい黒い長方形があるんだよね。

「ああ、それは窓です。地下牢に続く螺旋状の階段の途中で、外とすぐ近い所があつて、その岩をくりぬいて窓にしてあるんです」

うーん、ちよつと苦しい説明だけど、何となくわかった。

「あ、そうか！あの窓から出られないかな？」

王子が声をあげた。

うん、成程。地下を現在管理してるのはムルーらしいから、地下から直接海に出れるなら、その分見つかる可能性は大分減るんだ。

「ああ、あの窓なら 充分一人通り抜けられますね」

ムルーが、少し考えながらそう答えた。

「じゃ、そこから、でいい？」

と私が訊くと二人ともうなずいたので、もう一度質問した。

「で、ここの窓からだ海面までどのくらい？」

「うーん、今頃だと、大潮時だし……満潮時で3ティつてところかなとムルー。3ティは4・5メートルだから、うん。低くなった。良かった良かった。」

「それで城は出れるとして、そこから んと川ぐらいまでは泳いでいった方がいいのかな？」

「そうですね、そのくらい泳いだ方が城の見張りに見つからないで

すね  
と王子。

「じゃ、その距離は？」

「えーと、1000テイ、かな」

ムルーの言葉に、私は唸った。

「げー、150メートル？私そんなに泳げるのかなあ……」

今までの最高が確か50メートルだよな。

「足をつける所とかってないの？」

「多分、ないだろうな」

「うーん。ま、死ぬ気でやりゃ何とかなるでしょう……。王子は？」

「頑張る」

「OK。じゃとりあえず河口に着いたでしょ。そこからは、大丈夫？」

「河口付近の崖を　ま、2テイぐらいだから楽勝だけだよ　よ  
じのぼって、後は陸路になるわけだが……やってみるしかないだろ  
うな」

「じゃそっちの道の方はまかせるね。後は準備、か……」

「何が要りますか？必要なものはなるべく僕が集めときます」

「ん。まずね、縄はあるでしょ。登ったり降りたりするのに。あと  
服ね。多少なりとも変装しないとイケないし、私の格好じゃ目立つ  
でしょ」

何てったってパジャマだもんね。

「そっぴや、前から思ってたんだが、随分面白い服だな、お前が着  
てるの。大体やたらと細かく縫ってないか？」

そりゃミシン仕事だもんねえ……。

「でもこれ寝間着だよ。普段着るのは、ここの感覚からすれば、き  
つともっと面白い……」

しばらく、珍しそうに私のパジャマを眺めていた王子が口を開い  
た。

「えーと。それじゃ旅人の服を三人分用意します。あと、資金とか

食料とか要りますね。他には？」

「んー、あ、そうだ。ここの人ってみんな髪青いの？黒って珍しい？」

「ああ、緑の人とか紫の人とかいますけど、里菜のような真っ黒の髪の人っていませんね。……ちょっと普通では考えられない髪の色ですよ」

んなこと言われてもねえ……。

「何とか隠す方法ない？かつらとか染めるとかターバンとか……」

「旅人の中には髪を全部布でくるむようにしている人がいますからね。布を用意しておきます」

「ありがとう」

あー良かった。

「となると、そういうものなるべく濡らさず持ち出したいね。この翻訳機だつて濡らさない方がいいだろうし……。着替えの服もね。濡れた服なんて着て歩くと不審の元だし風邪の元。何か水を通さない袋みたいなのない？」

「ああ！皮で作った水袋があります。それで平気ですか？」

「うん、上等。服とかが全部入るくらい用意してね。それでその口をしっかり閉めて持って 綱をつたって海に降りて、泳ぎまくって川。着替えて で、ハーレ王国まで歩き？」

「それ以外、ないだろう。海から脱出じゃ馬を盗んでいくわけにもいかんし……」

ムルーがぶつぶつ言った。

「歩いて何日ぐらい？」

「えーと、八日ってとこかな。隠れながら進まなきゃならないし……」

「……食料が大変だね。途中で補給できる？」

「収穫前だからな、ほとんど望めないだろう。ま、水さえあれば死にゃしないし、水は各村の井戸からでも汲めばいいし」

私の問いに対してムルーが答えてくれて、それから王子が言った。

「幸い今年はよく雨が降って、井戸も涸れてないだろうしね。と、僕そろそろ戻ります。決行は、いつにします？」

「うーん、私達がないことをなるべく長時間悟られない方がいいんだよね。私とムルーは食事持った人が一日二回下りてくるだけだけど……。」

「王子が一番長い時間一人でいられるのって夜？」

「あ、そうですね。九時から朝の七時まで十時間」

「ここは地球と同じく一日が二十四時間なんだそうだ。」

「で、必要な物、何日ぐらいで集まる？」

「余裕を見ても 明後日中には必ず」

「じゃ明後日の夜九時決行ということにしよう。いい？」

「はい！」

と、明るく王子。

「ああ」

と、暗くムルー。

「それじゃまた明日！」

と言って帰ろうとした王子を、私は呼び止めた。

「あ、明日は来ない方がいいんじゃない？あんまり来ると、来てるのばれやすいでしょ」

「そーですね。じゃ明後日に！」

と言って王子は立ち去った。

ムルーは、内側から部屋に鍵をかけると壁際に坐り込んだ。

「うーん、計画洩れ、ないかなー」

「多分な。不安といえば海の民のことだけで」

しばしの沈黙。そして私が口を開いた。

「ねームルー。海の民との契約って、つまりどんなことをするの？」

「……人身御供だ。向こうの提示した条件に見合う人間を」

「ふうん」

条件をだすってことは人肉を食べてるわけでもなさそうだし……  
一体何をしてるんだろう？

「そういえば、昨日から訊こう訊こうと思ってて訊けなかったんだけど」

「なんだ？王子の御命令だから、俺は何でも答えてやるぞ。さっさと言やあいだろ」

「……だつてさー、ここの文化程度つてどのくらい？つて訊いたつてわからないでしょ」

「そりゃまそうだな。俺にしてみりゃここの文化程度は普通、だもんな」

「そーだよ。基準が元々違うんだから。」

「ただ、服なんかっから見て、私の国の方が文化程度高そうでしょ」

「ああ」

「なのに何で翻訳機なんて高尚なものがあるわけ？」

「ああ、そりゃ 先人の落とし物 だからな」

「……なにそれ」

「つまりだな、昔この世界にはひじょーに頭の良い方々がいて、色々わけのわからん絡繰り仕掛けを残して、どこかに消えてしまった。この翻訳機という代物はだな、その中で使い道のわかっている少々のものうちの一つだったわけだ」

「ふうん。じゃここは昔、遥かに高度な文明が栄えていたわけか。」

「そーいう絡繰り仕掛けはわけがわからんので、今じゃ各国王城で保管されてる筈だ」

「へー面白そー」

「見てみたいなー。」

「……ここを見るのはあきらめとけ。一応こないだ翻訳機を取りに行った時、王から保管室の鍵を預かったままだが、お前が歩くのは危険だからな」

「……はあい……」

「くすん。残念だ。」

「ま、ハーレ王国のをきつと見せてもらえるだろうし」

「ムルーは多分、慰めてくれたんだろうけど、私は思わず暗くなる」

ようなことを言ってしまった。

「無事に着ければね」

「……………」

それつきりムルーも私も口を開かず、壁の所に立ててある松明（なんだろうな、多分あれが。実物なんて見たことないから……………」が燃えている音が少しするだけで　ほんとに暗い雰囲気になってしまった……………。

七、しかし、計画通りにいかないのが世の常というもの…

「うーん……あーよく寝た」

私はそう言っただけで起きた。何せ地下だからお日様とは無縁だし、時計はないし……で、まるっきり時間がわからない。

でも放つとくと十五、六時間は寝てる私がよく寝た、と思ったんだから、きつともう昼過ぎだろう。それにしても、いつどうなるかわからない身で、石畳の上で布団もなくてよく眠れるもの……我ながら感心する……。

「ムルー！おはよー！！」

言ってみただけ返事がない。ムルーは檻のある部屋の外で番してる筈で……そこにいる限り、聞こえてないってこともないと思うんだけど……。

おっと。足音だ。少し慌て気味の。

足音は私のいる部屋の前で止まり、次にはガチャガチャと鍵を開ける音。そして入ってきたのは……。

「ムルー！どーしてたの？いないから、心配しちゃった」

「ああ、俺も心配した。突然王から呼び出されたんでな。計画がばれたかと……」

言いながら檻の錠を外す。

「で結局、用件は何だったの？」

「お前を連れて来いだと！ 一応、また嚴重に縛るが……悪く思うなよ」

「うん勿論。怪しまれたら元も子もないもんね。だけど私に、一体何の用な訳？王は」

縛りながら、ムルーは言った。

「とりあえず脱走計画のことじゃないらしい……から、この間の続きじゃないか？」

「あの、魔がどうとやらっていう？」

疲れるんだよね、あの問答は。

で、以前と同じく沢山歩いて、目隠しを取られて部屋に入ったら、今回は王子はいなくて、カーテンの奥で王が席に着いて待っていた。そしてムルーが退場し　王が口を開いた。

「魔よ。もう一度訊く。そしてこれが最後だ。　お前の目的は？」  
こーなつたら煙に巻いてやろう。

「現社会において、目的意識を持って動いている人間がどの位いるか、なんて知りませんが多分少ないんじゃないでしょうか。まあ、進学率九十八%の進学校の高校三年生としましては、とりあえず目的は大学合格というところなんでしょうけど、かといってとりたててやりたいことがあるわけでもなし……まー私は普通よりも目的意識のない高三生だと思いますが」

「……この翻訳機、壊れたのか？何だかわけのわからない言葉しか聞こえぬが……」

「壊れてませんよ、多分ね」

素直な私はそう言ってあげた。

「ということは　わけのわからないことを言って一体どうするつもりだ？何か事態が進展するとでも？」

「いーえ別に。遅れも進みもしないでしょうよ。でも別にわけのわからないことを言っただけでもありませんがね」

「……もう一度だけ言うぞ。目的は何だ？」

「おーや、さっきのが最後じゃなかったっけねー？」

「ふざけるのもいいかげんにするんだな」

「間違っただけとは言ってますよ。そーですね、でも真面目に言えというのなら……本心を言ってみましょうか」

で、思いつきり息を吸い込む。どーせ本心を言っつのなら、本心並の音量で。せーのお、

「んなもんないって言ってるだろ……このすかたん……！」

あーあ。ばいばいと言っただけで叱る、うちのがっこの校長先生

が聞いたら、絶対怒り出す言葉遣いだな。

「お前の本心はよくわかった。そしてお前の未来も決まった。

処刑だ！明日の……正午に」

あした……？ま、まずい。せめてあさつてにしよう！明日の夜逃げるから。

「いや、待てよ」

そ、そうそう。考え直そうねっ。

「お前は、私の顔を見るとい言葉を恐れなかったんだ……。興味がある。一度、私の顔を見せてみよう。万一生きていたら……お前はトーレを気に入ってるようだし……丁度良い。トーレの母親になるんだな」

母親……ははおや……ってことは、ええー冗談じゃない！十七才で十二才の子の母親になってたまりますか！ いや待てよ、論点がずれてる……そーだ、どーして好きでもない奴の奥さんにならやあかんのだ！冗談じゃないっ！

……っていうのに……王はムルーを呼ぶところ言った。

「明日の正午に私の寝室にそいつを連れて行け。処刑になるか

どうかは、まだわからぬが、な」

し、しんしつだど〜。冗談ではない！というのだ！！

でもまだ明日で助かった〜今日これから、じゃ、何の手も打てないとこだった……。顔を見せること、すなわち処刑、になるかもしれないから、予定の時刻は変わらなかつたのね……。

えーと、顔見せられても死なない自信はあるけど だけど、どいう根拠で自分の顔（？）にあんなに自信持つてるのかね、あの王は。やっぱ過去の実績かしら。とするとやっぱり危ないかなあ……うーむ。

いいや！誰が死んでやるもんか！！しかし、死んでやらないにしたらってあんな奴の嫁さんになるのはごめんだ。とするとやっぱり……手を打つしかないだろうなあ……。

そんなことを、牢に至る道中考え続けて、で、牢に着いて目隠し

が外されるなり私はムルーに言った。

「ムルー！王子と連絡とって！全部揃わなくてもいいから、物を揃うだけ揃えてって」

「じゃあ……」

「私の都合で予定変更して悪いけど　今夜決行よっ」

七、しかし、計画通りにいかないのが世の常というもの…（後書き）

そういえば、一番最初、このサブタイトルは「しかして、……」でした。読んでくれた友人に「しかしてってそしてって意味だよ」と指摘されて、「しかし、……」になったのです。知りませんでした、「しかして」の意味。

## 八、とりあえず逃げ出した、のはいいけれど

夜。何時だかわからないけど、とにかく夜。私は階段の途中の窓の下にいた。

灯りといえば、窓からわずかに差し込んでくる月の光ばかりで、暗い。まあ、かなり目は慣れたけどね。

「王子、どうしたのかな。うー、一人でいると悪い想像ばかりしちゃってよくないわ……」

呟いた途端に螺旋階段の上から足音。そして王子が現われた。

「すみません、遅くなって。何しろ大荷物だから人目につかないよう持つてくるのが一苦労で……。あれ、ムルーは？」

と、サンタさんのように荷物を抱えた王子が言った。

「えっ会わなかった？私をここに連れて来て『ちよつと待つてる』って言うて行っちゃったから、てっきり王子を迎えに行つたんだとばかり……」

「いえ、会いませんでしたけど……。行き違つたのかな……。まあ何かあつてもムルーなら大丈夫でしょうが……」

「そーお？じゃこの間に荷物点検しとこうか。揃つた？」

「はい、大体」

で、広げてみると……大袋の中に中袋と小袋数枚。長い布も数枚、お金（だろつ、多分）の入つた袋、食料らしきもの入つた袋、地図、服三着、綱……。

「随分立派に集めてくれたね。時間もなかつたのに。大変だつたでしょう」

王子はにこつと笑つて言った。

「それほどでも」

嘘だね、やっぱ大変だつたと思うよ。それを口に出さないとこなんか、十二才とは思えない偉い子だね。ムルーの誉め様もわかる気がする。

「あと適当に使えそうなもの持ってきました。松明とか火打ち石とか小型だけど弓矢とか短剣とか」

「おー、よく気をつく子だ。それにしても  
。ムルー遅いね」

「そーですね。あ、でも足音ですよ」  
コツコツコツコツ。

「遅くなつてすみません、王子」  
ムルーは手に何やらごちゃごちゃ持っていた。

「どーしたのムルー。何持つてる訳？」  
王子の問いに、ムルーは

「ああ、どうせ行く先々で必要になると思って翻訳機を幾つか持ってきたんです。それと」

「言つてから私の方を向いて、何だか色々なものを手渡してくれた。興味、ありそうだった。お前なら使い方わかるかもしれんと思つて、小さい物を適当に取ってきた」

「えっわざわざ？翻訳機だつて私のため、だよ、結局。  
有難う」

「いや、脱走に役立つ物もあるかと思つて」  
と、ムルーはそっぽを向いた。はは、照れてるのか。

「えーと。何か見覚えのある物が多いな。ライターでしょ懐中電灯でしょ腕時計でしょ。ありやこの時計ちゃんと動いてる。地球と同じく十二が上で三が右で……という見方でいいんだつたら九時三十五分つてとこかな。ちよつと、これ古代の物じゃなかったっけ。何だつて今まで動いてんのよ！」

「うーん、今の地球より高度な文明だったみたいだからなー、永久電池でも発明されてたんだろ。」

「それにしても、随分地球と似通った文明だったんだなあ。こんなに機器が似てるとは……。」

「えーと、こつちのは おつと。  
「おい、見るのは後にしろ。早く行かないと」

「あ、ごめん」

私がさぼってる間に既に荷物が三つに分けられていた……。で、余っていた小袋の一つにムルーが持ってきた翻訳機その他を入れて、更にそれを私が持つ分の中袋の中に入れて。

「あ、王子。王子の分の荷物、私が持つよ。貸して」

「え、どうして？」

「王子泳いだことないんでしょ。泳ぐことに専念した方がいいよ。私も泳ぎ自信ないけどとりあえずは泳げるから……」

「だったら俺が荷物を」

「ムルーは王子を連れてつてよ。助ける人がいれば、泳ぐのも大分楽なんじゃない？ 浮き輪でもあればいいのにね……」

ま、無い物のことを言ってもしょうがない。

「使ってる翻訳機も袋の中に入れちゃおう」

という訳で、その後は会話が不可能になった。王子とムルーは何やら喋っていたけど、わかる筈もない。

そして無言で、脱走計画は開始された。

## 九、さて一体どうなることやら。

窓までの高さは 170センチくらいかな。手をかけられる高さだし、壁は結構でこぼがあるから何とか登れそう。窓は別に格子がある訳でもないし……。

ムルーに後ろから押ししてもらって、まず王子が登る。王子がまだ窓枠にいるうちにムルーが軽々と登る。

うーんさすがにあの窓枠に三人じゃ定員オーバーだな。誰かが向こう側に降り始めてから登ろう。

ドカツ。何か物凄い音がしたけど、何やったんだろう……。

しばらくして、ムルーの姿が見えなくなった。んじゃ登ろうかな。窓枠に手をかけて、壁のでこぼこに足かけて、よいしょと。ふうー。

王子がにつこり笑いかけてくれた。

おっと。さっきの物音の正体がわかったぞ。ムルーが短剣をぐさぐさとさした音だ。刃の部分がほとんど埋まってる短剣が私のすぐ横にある……。馬鹿力だなあ……。

でもって、そのつかの部分に綱の端が結び付けられていて、その綱をつたって今、ムルーが降りているところ。

この短剣の刃って丈夫なんだなあ……。ムルーの体重を支えられるなら、王子も私も大丈夫だろう。

それにしても。海面まで本当に4.5メートルなんだろうか。暗いせいもあるだろうけど、全然下が見えやしない。ムルーの姿も見えなくなってきた。

次に王子が用心深く降りていった。

うーん、4.5メートル……。そういや満潮時でって言ってたっけ。干潮時だともっとあるんだろうなあ……。

王子の姿が見えなくなってきた。じゃあそろそろ行こうかな。

私は綱をしっかりと持って、壁に足をかけながら降りて行った。

滑り降りれば早いだろうけど、綱を持って滑り降りて、手のひらを火傷した人を知っている……。

ざぶん、ざぶん……と波の音が聞こえる。そういえば海に入るんだよね。日本の夏並の気温とはいえ、夜だし、水は冷たいだろうな。準備運動をしとくべきだった……。

ぼちゃ。あ、足が水にさわった。海だ。一気に綱から手を離すとう、渦だ！うわー！荷物が！王子たちもやっぱり巻き込まれてるんだろうな……冗談じゃない！苦しい！ごぼっぜっぜっごぼっ。と、声。

『お前たちは我々と契約していない。どこの者だ？一体誰だ？』  
こ、こんな時にそんなことゆーちよーに訊かないでくれっ。あれっ私、翻訳機してないよね。何でわかるんだ？ あっこれ頭の中で聞こえてるんだ！じゃ、いわゆるテレパシー？

『どこの者だ？』  
ああ海の民とかいう人、本当にいたんだね。ムルールの反対押し切っつて悪いことしてしまった……。

『ムルー？砂漠アベリの民の傭兵の、か？』

あら、ムルーって本当に有名なんだ。でもムルーは今は傭兵じゃないんだよー。今はねートーレ王子の……。

『待て』

あれ、今まで質問してた人と違う人みたい。なんか、感じが違うような気が……。あー、なんだか、もーろーと、して、きたなー。

『娘。お前 黒髪に黒い目、のようだが……松浦里菜か？』

え、何で私の名前知ってるの？

『では、やはり松浦里菜なのだな？』

『おお！サオトムムの言いし彼の人か？』

『そして全ての民の血をひくトーレ王子に、砂漠アベリの民の若長の乳母のめ子こときは、助けぬ訳にはいくまい』

『それでは』

そこで記憶が途切れてしまった。  
多分、気絶したんだろう。

「里菜！大丈夫ですか？」

あー王子の声だ。テレパシーではないから、きっと翻訳機をはめてくれたんだろうなー。

「あっ里菜が目開けたよ、ムルー」

「王子？おはよー」

「おはようございます」

起き上がりながら訊いてみる。

「私達、助かったの？」

「ああ、どうやらな」

とムルーが言った。ムルーは枯枝を集めていた。

そこは海ではなく、森の中の、川の近くで、流された筈の荷物までちゃんとあった。

「どういうこと？」

「さあ。渦に巻き込まれて気絶して、気付いたらここだ。どういふことなのか、お前が知ってるのかと思ったが……」

「知らない……あ、でも海の民

ドーナト

の会話らしいの聞いたなあ。サオトム<sup>アヒリ</sup>の言いし彼のひと、全ての民の血をひくトーレ王子に、砂漠の民の若長の乳母子ときては助けぬ訳にはいくまい、っていうの」

めのとこ、でムルーがびくつとしたようだった。

「……夢でも見たんじゃないか？」

「そうとも思えないけど。大体、ムルーあんたアヒリの若長の乳母子ってのに心当たりありそうだねー」

「全くないー」

その、むきになるところが怪しい、っていうのさ。

「でも実際、ドニートのおかげ、とても思わないとこの状態は説明  
できませんね」

と王子が呟いた。

「この状態？」

「そう。どうやら僕たちは、ズア川を逆流してきたみたいなので」

「えっ。つて、ここどこな訳？」

王子は地図を開いた。

「ムルーが言うには……多分ここだつて」

と言って王子が指したところは。

「じゃ、もうプリチュ王国でてるの?!」

「そう。ここからならハーレ王城まで、四日もあれば充分辿り着け  
る。えいくそこのやる点かな」

ムルーが火打ち石と格闘していた。

確かライターあつたよね。ごそごそと荷物を探す。ええつと……  
袋が沢山あると大変……。あ、あつたあつた。

「ムルー、替わる」

ぼっ。ついたついた。枯枝を燃やして、と。

「へー」

王子は目を丸くしていた。

「便利な物だな」

とムルーも言った。

「でしょ。ライターっていうんだよ」

「ふーん。じゃ、火もついたことですし と言つても枯枝があま  
りなかったなのでこの火も長くは保たないと思いますが 王子、着  
替えて服を乾かしちゃいましょう」

うん。確かにいくら夏とはいえ寒いわ。全身濡れ鼠じゃ。

「そうだね。じゃ、はい、里菜。体ふく布と着替え」

「ありがとう。じゃちよつと向こうで着替えてくる」

えーと、今渡されたこの服つてつまり貫頭衣なわけか。ふーん。  
古代のつばい服つて興味あつたけど、まさか着る機会があるなんて

ね。

ドニートにどんな意図があったのかわからないけど、とりあえず四日分得したわけだ。かくなる上はプリチュユ王の追手に追いつかれないうちにハーレ王国に入らないとね。

それにしても、サオトムムって一体誰だろう？何でその人が私のことを言ってたって？

ま、とにかく、行くしかない、と。

九、さて一体どうなることやら。(後書き)

「第一章 虜囚」はこれにて終了です。第二章は「逃亡」になります。その名の通り、逃亡生活をお送りします。

## 一、月（前書き）

一章では続けて読むと粗筋になるサブタイトルをつけていきましたが、それを延々と続けるとネタばれもいいところなので、二章からは普通のサブタイトルでお届けします……。

## 一、月

うーん。どうしようかなー。

ズア川沿いの森の中で気付いて以来、時折休みを挟みつつ歩き続けて、今は夕方。所は草原。

王子とムルーは弓矢とかの武器を持って少し先まで出掛けていった。十分位前にムルーだけ一度戻ってきて、料理をしると言って材料を置いていった。で、私は今、その材料の前で目一杯悩んでいる……。

別にね、料理が出来ないってわけじゃないんだけど。家庭科の調理実習の時のノートさえ（あと材料と）あれば、親子丼だって作れるし、ちらし寿司だって作れる。

そりゃあね、料理が得意だ、なんてどうあがいても言えないけど。だけどノートがなくなっちゃって、目玉焼きとか焼き肉とか、とにかく生存していくのに困らない程度の食べ物なら作れる。自分の世界でなら、ね。

こんな……ムルーがそこらで狩ってきた、何だかわからん動物の死体を置いてかれたってどーやって料理するかなんてわかるわけないじゃないか……。

結局、なす術もなく、王子とムルーが帰ってくるまで私は火だけおこして待つていた。

「何、だ。全然出来てないじゃないか」  
帰ってくるなりムルーが言った。

「私はそもそも皮のはぎ方からして知らないぞ！」  
ムルーは新たな獲物をその辺に置くと、坐り込んで小刀を手にし、夕食の材料 に向かってざくざく手を動かした。

「出来ないなら出来ない、さっさと言やあいだろ。そうしたら無駄な時間を作らずに済んだのに」

う、やっぱりさっきまで生きてた物が切り刻まれるところなんて、あんま見るもんじゃないな。目、そらしたいけど　しかし、これから御馳走になるうというのに、目をそらすというのも礼儀に反してるような気がして、ほとんど睨むような調子でそれを見つつ、それで口答えをする。

「お言葉ですがね、料理をしるただけ言つて有無を言わず、ここからさっさといなくなったのはどこのどなたでしたっけ？」

「……」

へん。ほーら何も言えなくなった。ま、わかってるけどさ。ムルーが王子から一時たりと離れていたくないっていうのは。いくら四日分のリードがあるとはいえ、気は抜けない状況だもんね。

おっと。私とムルーの問答を聞いて、王子がずっとくすくす笑ってる。ふーん。気は抜けない状況なんだけど、王子にとっては楽しいらしいや。何となく顔色もいい。

「王子、元気だね」

王子はにこつと笑つて。

「あんまり笑つてられる状況でもないですよ。でも狩　どころか城から出たのも七年ぶりだからつい……」

「　七年間ずっと城の中?!そりゃひどい。そーか、それでそんなに青白い肌に　なつたわけじゃないのか。よくよく見てみればムルーの肌もちよつと青味がかつてるか」

「?　どちらかといえば里菜の肌の方が珍しい色だと思いますけど?」

ん?じゃこの星の人はみんなちよつと青味がかつた肌つてことか。ムルーが肉を小枝にさして焼き始めた。

あ、そういえば……。

「王子、訊きたいことがあつたんだ。サオトムつて誰?」

「サオトム?サオトムつていうのは山の民長のことです」

「山の民つてえーとトムの?」

「ああ、そうとも言えるし……そうじゃないとも言えるし……つて

とこですね」

「あん？」

「えーとですね、サオトナムというのは全ての民の上に位置する人達なんです。だけど直屬の民はやっぱり山の民トナムです。だから山の民トナムには長がいませんしね」

「ふうん??？」

うーむやっぱり異民族の慣習(?)って理解しがたいものがあるなー。

だけど確か、聞くところによれば流浪の民自体かなり偉いんだよね。その民みんなより上なんだから相当なお偉いさんなんだろーなうーん。

「焼けた、な。 王子、どうぞ」

「有難う」

「ほら里菜」

「どうも」

それで三人で肉にかぶりついた。うーん、味がないうー。お醤油が欲しい……。これから先の冒険行を思えば、やっぱりエネルギー源は取つとかなきゃいけない。だから食べるけどねっ味がなくても。だけど一体、何の因果でこんなことになっちゃったんだか。ほんとに全く……。

夕飯を終えてから、残りの肉を袋に詰めて、そうしてさっさと寝ることにした。

日はもう沈んでしまったし、お月様はまだ出てなくて、行程を進めるにはちよつと暗すぎる、というので、早寝早起きをして朝歩くことに決めたのに目が冴えて眠れない。

日頃、街燈で闇夜ですら明るい所にいるから知らなかったけど、月が出てないと夜は本当に暗い。もっとも獣除けに火を焚いてるから、この辺は少しは明るいけど。

ごろつと体を動かして、仰向けになる。 うん、星がよく見え

るなあ。地球じゃないなら当たり前だけど、知ってる星座は見当たらない。でも私、地球の星座だって北斗七星とカシオペア座とオリオン座ぐらいしか知らないんだけどね。

うーん、本当に感動するぐらい星がよく見える…あれ？ちよつと待て、変だぞ。私今、コンタクトレンズも眼鏡もしてないよね。なのに何だつてこんなによく物が見えるんだ？

例えば地上の光が邪魔しないから、とか、空気が澄んでるから、とかで星が普段より多少よく見える、なんてことはないわけじゃないだろうけど、いくらよく見えたって、その程度は 多少 だよな。今 異常 によく見えるぞ……。

忘れてたけど考えてみたら私って目すごく悪いんだよね。左右とも〇・一ないもん。……〇・〇一位かな。そんな視力で星空が見える筈がない。それに牢で目が覚めて以来ずっと、見えない！って思った覚えがないし、王子の顔もムルールの顔も判別出来るんだから、うーん何でだかわからないけど、私は目がよくなったらしい。

そんなことを考えていたら、いつの間にか月が出ていた。半月かな。うー、考え事してたせいか余計目が冴えてしまった……。眠んなきゃ。

それでごろごろ動き回っていたら、王子が目を覚ましてしまった。「里菜？眠れないんですか？ 明日は今日以上に強行軍になると思いますし、寝ておかないともちませんよ」

「うーん、それはわかっただけだね」

うん、やっぱリーメートル位離れた所で横になつてる王子の顔さえはつきり見える。やっぱり目、よくなったらしい。

王子は空を見て言った。

「 月が出るところですね」

へっ？月ならさつきから出てるよ、と言おうとして、私も空を見、そして絶句してしまった。なんでか、というと 月が、二つあった。

ああ、ここって本当に地球じゃないんだなあ、と、何だかしみじみ納得してしまった……。だって、地球には一個しか衛星ないもんねえ。

私が一人、しみじみ納得してるうちに、王子はまたすやすやと寝息をたてて眠りに落ちていった。今度は起こさないように気を付けようつと。

……星がよく見える。

ここが本当に地球とか離れた星なら、あの中のどれかが、私が日頃見慣れた太陽かもしれない。でも、宇宙船になんて乗った覚え、ないんだけどなあ……。

一、月（後書き）

親子丼とちらし寿司は私が高校生の時に調理実習でやったメニューです（苦笑）。

## 二、草原の民へプテス（前書き）

予約投稿に初挑戦してみます。

……そして失敗して即日投稿になりました……。  
（日付を間違えたのでした）

## 二、草原の民へプテス

うとうとうと……と、やあつと、眠れ始めた頃、ムルーに叩き起こされた。うー、もう朝か。眠いよー。

突然パンが飛んできた。

「ぼーっとしてないで、喰え！」

「あーうん……」

でもロールパンの仲間だなあ。苦手だなあ。間に何かはさんだりすれば、ロールパンでもまた話は別なんだけど。仕方ないから食べるけど　しくしくおうちが恋しいよお。

私をもぐもぐ食べてる間に、さっさと食べ終わった王子とムルーは、地図を広げて話をしていた。

「今は多分この辺、です。プリチュ王城からここまで、馬でも二日はかかりますから　追い付かれるとしたら、今晚か明朝くらい……」

「うん。でもこんな先まで来るとは追手も思っていないだろうね」

「それはそうですね。でも油断は禁物ですし　。追い付かれたらやっぱり戦って血路を開くしか道はないでしょうが……」

ムルーは少し考え込むと私の方を向いて言った。

「里菜、お前剣を使えるか？」

「使えない。　　というか、使ったことない」

と私は答えた。

ムルーは渋い顔をして。

「……男に見えてもやっぱり女だしな……使えないのか……」

「え？私、男に見える？」

と訊いたら王子が答えてくれた。

「背、高いし。髪短いから。」

男の人は髪の毛長かったり短かったり色々ですが、髪の毛の短い女の人っていませんからね」

ふうん。でも背、ねえ……。

「背高いつて、ここじゃみんな身長どれ位なわけ？」

「女の人が一テイぐらい。男の人で里菜ぐらい、かな。ムルーや口ツフ王はかなり大きいですけど」

「じゃ、女一五〇センチ、男一六〇センチってどこか。うーん、それじゃ私でも背が高いことになるな。学校じゃ真ん中ぐらいなんだけど。」

私がパンをやっと食べ終わったので、出発することになった。よしよつと。足に巻きつけてある靴の紐しめなおして。万が一通行人でもいた時の為に、布をかぶって髪の毛全部隠してつと。

「里菜」

ムルーが呼んだのでそつちを見ると、ムルーが鞘ごと剣を差し出していた。

「使えなくても、一応持つてる。ないよりはいい」

ふむ。私はそれを受け取りつつ、言った。

「じゃこれは持つておくけど、それならムルーが保管室から持つてきた物、私に持たせてくれない？今、ムルーが持つてるでしょ」

「？それは別に構わないが、どうせお前にしか使い方わからないんだし、どうするんだ？」

「んー、切り札があるんだ。」

どーせ追手は私のことを魔かもし

れないと思ってるんでしょ？だったら魔のフリするのも効果があるんじゃない？ 上手くすれば魔王並にこわがってもらえると思うよ」

上手く使えれば、ね。

そしてそれから数時間、私達は歩き続けていた。色々なことを喋りながら。

喋っていて知ったんだけど、今日ってここでは八月二十四日なんだそうだ。

「それじゃ、旅を始めた昨日が二十三日で、牢を逃げたおとといが

二十二日で……私がここに来たのが、八月二十日？」

「ええと、確かそうでした」

ふーん。ここに来る前の地球は九月の半ばだったけど。　うーむ。私は今日で四日も学校を休んでるのかな。お父さんやお母さんやお兄ちゃんや、先生とか友達とか、一体私はどこに行ったと思ってるんだらうか。

あれっ後方から……馬か何かに乗ってる人の集団が。追手?!と私が思うより早く、ムルーは目をこらし、王子は叫んだ。

「ムルー! 追いつくにしては早過ぎるけど　追手?!」

「いえ、あれは……草原の民のようです」

「草原の民?! 本当に?!」

王子が、私が見る限り初めて、子供らしくはしゃいだ。

「どーかしたの? 王子」

「僕草原の民って初めて見るんです!」

「王子は、プリチュ王国にいた時のみならず、ハーレ王国にいた時でさえ、年に一、二度の遠出以外では国から出たことないですからね。この分だと、あの小群団ごく近くを通りますから、じっくり見ておいて下さい」

ムルーが言った通り、その草原の民の小群団は近くまで来た。だけれど来ただけではとどまらず、その一群の先頭を走っていた、リーダーらしい人の合図で、私達のごく近くで止まってしまった……。

おおおおお! そのリーダーらしい人の乗ってる馬は、もしかしてユニコーンではないか! 一角獣!　黒い綺麗な馬体の額から、白い角がすらつとのびている。……これは間違いなく一角獣! うわーうわー、きれー。かっこいー!

お馬さんにミーハーしていると、そのユニコーンの乗り手は、ユニコーンに乗ったまま、更に近寄って来て、言った。

「旅人か? お前たちは」

「ああ、そうだ」

とムルーが答えた。

ふうん、この人若いなあ。二十つてとこかな。若いのにリーダー  
ってことは、身分があるか、余程きれる人かつてことかな。  
と、観察していたら、向こうもじつとこつちを見た。やば。失礼  
だったかな。かと言ってここで目をそらしたらもつと失礼だろうし  
……。  
にじつ。

笑ってみたけど、ひきつっちゃった……。  
すると、その若い男が言った。

「娘。変わった色の瞳をしてるな。どこの者だ？」  
うつやばい！目の色が人と違うの忘れてた！！

「あのですねーどこの者かと言われましても……」

「え？どういふ言葉だ？それは」

へっ。あー私は翻訳機してるから向こうの言葉、わかるけど、向  
こうにしてみれば、私の使ってる言葉はわけのわからない言葉なん  
だ〜！

「えーとえーと、ムルー！翻訳機！」

「今朝お前に渡した袋の中だ」

「あ、そうか。えーとえーと」

何か、あせつて探そうとしたら上手くいかない。そうしたらムル  
ーが私から袋をひったくって、落ち着いて探してくれて、そして一  
組の翻訳機をその男に差し出してくれた。

「これを耳に」

と言つて。

「耳？ああお前たちがしているようにか？」

その人はしばらく、手のひらにのせた翻訳機を観察してから、そ  
れを耳にはめてくれた。

「えーと、わかります？」

と私は言った。

「ああ」

「どうも失礼しました。初めまして」

その人はまたしばらく私を見て、それから言った。

「……変わった奴だな、お前は」

「そうですか？たかだか目の色が違って、言語が違うくらいでしょ  
う？」

「それだけでも大したものだと思うが。この星には言語など一つし  
かないのだから」

「え……そうなの？」

振りかえって訊いたら、王子がうなずいた。

「大体、それだけじゃないんじゃないか？」

とその人が言うので、えっと思つて正面を向くと、その人の腕が私  
の頭の布にのびていた。

「げっ。それとっちゃだめだよ。だめだつつうのに、あーあ。  
ほらな」

その男は、にやつと笑つた。 後ろの、馬に乗つた団体さんは

驚いていた……。

## 二、草原の民へプテス（後書き）

昔この部分を読んだ友人から「言語が一つなのに、どうして翻訳機があるの？」と訊かれました。うっかりしていた……わけではなく、伏線なのですが、伏線が回収されるのはかなり遠い先の話……。

### 三、レスティ（前書き）

くやしいので再度予約投稿に挑戦。

### 三、レスティ

まだ、昼だった。プリチュ王国を脱出して二日目　つまりこの世界に来て五日目の。

なのに、急いでハーレ王国に行かないといけない筈の私達三人は、何故かテントの中にいた。

勿論、私達がそんなものを持っているわけがない。草原プテスの民のテントだった。

プテスさんだって、夜行性じゃあないだろうから、わざわざ昼間にテントを張った、というのは、ひとえに私達を招き入れるためだろう。

そうになると、それがむこうさんの好奇心を満たすためでも断わるわけにはいかないよなあ。もし仮に、急いでるからって招待を断わったりしたら「無礼者！」とか言って怒りだしそうだし。（「流浪の民」っていうのは、そこらの人間より偉いから、そんなことをしたら実際無礼なんだそうさ。おまけに草原の民って短気でケンカ好きらしい。ムルーが言うには）そうだったら「多勢に無勢」ってもんだろう。それに何より、王子とムルーが御招待を受ける気になつたのには、私のこの台詞が効いた。

「御招待というからには、何か食べ物でるよね。私らってあんまり食糧持ってないんだよねー」

という……。

「さて」

と、テントの一番奥に座っている若いリーダーさんが言った。

リーダーさんの正面に、私達三人がいる。但し！正面とはいえ両脇にずらずらずら〜と人が座っているわけ。つまりテントの一番手前、出入口が一番近い所に座らされているわけなんだな、私達は、えっと私達とリーダーさんの間に、一・二・三・四・五……

十一人ずつ。私達もいれると二十八人が一つのテントの中に余裕をもって座ってることになる。　　いかにテントが広いか、ですな。それに加えて、料理を持って出入りしてる人が結構いるみたい。いやはや。ほんと、すごい広さだ。

「さて、お客人。特に真ん中の娘には、正体など明かしてもらいたいところだが」

私に対して発せられた質問のようなのに、私の右隣のムルーが言い返した。

「その前にそつちの正体を明かすのが筋ってもんじゃないか？」

うーむ、小説か漫画で見かけたような台詞だ。

でもって、ムルーからリーダーに発せられた筈の問いには、リーダーの左隣の、一番年とってそうな人が言い返そうとした。

「若に何という無礼……」

「じい、よい。　　確かに筋だな。私の名はレステイという」

「レステイ？」

ムルーがちよつと首を傾げた。

「草原プラテスの民でリーダー格で若でレステイ？どこかで聞いたこと

あつ！草原プラテスの民の長の息子で、次期長のレステイ？」

「ほう、よく知っていたな。流浪の民の長の息子の名など有名ではあるまい」

「　　俺も流浪の民だからな」

とムルーが答えると、レステイとかいう人は興味を持つたらしく、

「ほお！どこの者だ？　　今度は答えてもらえるんだろうな？」

と言った。ムルーはそれに答えて言った。

「勿論。　　俺は砂漠アビリの民のムルーという者だ」

そうしたら周囲がざわついた。そのざわつきを代表してか、　　じい　　が尋ねてきた。

「砂漠の民のムルー？！あの、半伝説化している傭兵の、か？」

「そうだ。が、半伝説化、というのは一体何なんだ？」

その問いには、レステイさんが答えた。

「数年間、行方不明だったろう　　そうか行方不明の間、その娘に仕えていたわけか」

「ぶつとムルーは口に含んでいた飲み物を吹き出した……きたない！」

「冗談！何で俺がこんな小娘に！俺が仕えているのは」

「ムルーは台詞を途切れさせた。言うべきことかどうか、悩んだんだろう。だけど既に、レステイさんの視線は王子に向かっていった。」

「それならお前の仕えているのはその子供、ということか？　そ

この娘が小娘なら、この子供も十分小僧だと思うが……。さて子供。

お前の名は？」

「あっけらかんと、王子は答えた。」

「トーレ、です。レステイ殿」

「周囲がまたもやざわついた。」

「トーレ……王子？」

「ハーレの王子の？」

「プリチュの王子の？」

「ざわざわ」

「うーむ、我ながら笑える状況描写だ。」

「で、レステイさんが言った。王子に向かって。」

「トーレ王子？仮に貴公が本物のトーレ王子だったとして　　プリチュの次期王たるものが、こんなところで、この少人数で何をしているのだ？」

「周囲が　　わきたった。レステイさんの問いに対する答えなんてみんな聞かなくなっちゃってわかってるんだろうな。だから、もし王子が本物なら、プリチュに連れていけば謝礼がもらえる　　そう考えてわきたっているらしい。」

「で、ざわざわが最高潮の中で。レステイさんは私に訊いた。」

「娘。いやに落ち着いてるが、どうしてだ？」

「　　こうなることが十分予想できる状況で、王子が不注意で自分

の名をもらしたとは考えにくいから、何か勝算があるんだろうと思  
って」

と私は言った。(ちなみに翻訳機はレスティさんにしか渡してない  
ので、私の台詞はレスティさん以外の草原の民の面々には通じない)  
けど心中は全く落ち着いてなかったりする……。でも王子つて  
並の十二才じゃないからな！。私なんかよりよっぽど冷静。時には  
二十八歳のムルーよりも大人に見えたりする程。だからこの場は王  
子に任せてしまおう。

「勝算が……あるのか？」

とレスティさんは王子に尋ねた。王子は静かに答えた。

「大したことじゃないんですけど」

で一拍おいて。

「ただ草原ブテスの民はプリチュには寄り付かないようにしているらしい  
し、謝礼は別にプリチュからしか出ない訳じゃありませんから」

「だが、プリチュの王に恩を売っておけば後々便利だ」

「あの王が恩などを買うわけがありません。第一、誇り高き草  
原ブテスの民ともあろう者が、魔などと手を結ぶつもりですか？」

「……」

うーん、この勝負、王子の勝ちだな。やっぱ十二才とは思えない  
な！。ムルーがべた惚れなのもわかるな！。で、ムルーの方を見て  
みると。案の定、得意気な顔をしていた。

「トーレ王子」

とレスティさんが言った。

「気に入ったぞ」

そしてにこつと笑った。ああ、一安心……。と思つたら、レステ  
イさんは突然こつちを見て言った。

「娘。お前の名前を聞いてなかったな」

「……里菜です。松浦里菜。どーせ訊かれるんだろうから言っ  
ときますが、出身地は日本ですからねっ！」

### 三、レステイ（後書き）

笑える状況描写とは「ざわざわ」のことです。……解説を入れなくてはわからないかも、と思ったので、書いておきます（^^）。

#### 四、手合わせ

そうか『飲めや歌えや……』っていうのはこういう時に使う言葉だったわけか。と、思わず納得する騒ぎが起きていた。

「半伝説化した傭兵」のムルーはほとんど主役していて、王子と私はなーんとなく、隅っこでものを食べていた。

うーん、このドーナツ型した果物は美味だなあ、などと呑気に考えていたら、いつの間にも隣にレスティさんが来て座っていて、そして言った。

「娘」

あーもう全く。ムルーといいレスティさんといい……この星には女やら娘やらって呼ぶ習慣があるのかね。

「あのですねーレスティさん。私にや里菜っていう、立派……かどうかはわからないけどとにかくちゃんとした固有名詞があるってさっき言いましたよね」

「……ああ、これは失礼。リナ、か。リナ、先ほど言っていた、っぽんというのは何なのだ？それに、お前の髪や目の色、その言語……」

思わず私は王子に助けを求めましたね、本当のことを言うべきか否かの決断の。そうしたら王子が頷いたし、まあ私もこの人に嘘を言ってもムダのような気がするし（もっとも本当のことを言っても信じてくれるかどうかはわからないけど）とにかく話してみることにした。

「ほう……」

とレスティさんは言った。

「テアアリ星ですらない、むやみやたらと遠い所にある、地球という星の、日本という国にいたはずのお前が、目覚めてみればテアアリ星のプリチュ王国の牢の中だったと」

「あ、現われたのは僕の目の前でしたけど」と王子が口を出した。

「で、それを私に信じろ、というのか？」

「別に。信じる信じないはレスティさんの自由だと思いますし……。信じられませんか？」

「さあ。ま、どちらかといえば、そんな作り話を思いつける、という方が信じられぬしな」

レスティさんがそう言った頃、ムルーの辺りのざわめきが一層大きくなった。みんな、

「おお、それはいい」

とか何とか言っている。で、レスティさんが近くの人を掴まえて訊いた。

「どうした？」

と。するとその人は、

「あの、アインの奴が、ムルー殿の剣技を見てみたい、と言い出しました……」

と答えてくれた。成程。それでムルーが、

「別に見せる程のものでは」

とか言っただけで断っているわけか。ムルーがそんな風に拒否しているにもかかわらず、レスティさんは事の成り行きを聞くと、

「それは面白い」

と言いつつ立ち上がって、ムルーに向かって言った。

「是非手合わせを願いたいものだな」

ムルーは思いつきり渋い顔をした。

少し経って。テントの中にいたメンバーは皆そろって外に出て、円を作っていた。私と王子も円の構成員。

円の中にはレスティさんとムルーが、各々の鞘から抜いた剣を片手に立っていた。

つまり、ムルーは断りきれなかったという訳。

ムルーは剣を軽く手のなかで玩ぶと、一つため息をついて、それからちやんと柄を握った。

その様子を見てレスティさんは、「用意はいいみたいだな、では」

と言つて、剣を持った腕を伸ばす。そして軽く、二つの剣の刃先が触れ合った。

途端、手合わせが始まる。

ムルーが左から右へと、剣を持つ手　右手を動かし、レスティさんの剣を薙ぎ払おうとする。

レスティさんはすつとほんの少しだけ後ろによけて、ぎりぎりですそれを躲す。

薙いだ反動でムルーの右手が大分右に行き、体の正面があく。

その隙を狙つてレスティさんがムルーに斬り込む。

ムルーは右手をそのまま後ろに回し、斬り込んでくるレスティさんに向かって思いっきり振り下ろす。

ガキーン、と二つの剣がものすごい音をたててぶつかる。

変な話だが、心配してしまった。刃こぼれしないだろうか

？

合わさった剣先が、次第に上へと持ち上げられる。

二人とも柄に両手をそえて、満身の力をこめているのが、腕と剣先の震えでわかる。

けれども剣はそこから少しも動かない。

その状態でレスティさんが口を開いた。

「さすが、伝説と化しているだけのことはあるな」

ムルーも言った。

「そちらもな」

そしてどちらからともなくニヤツと顔に笑みを浮かべると、どちらからともなく剣を引き、鞘におさめる。

張り詰めていた場の雰囲気が一遍に和ぎ、周囲が沸き立つ。草原の民たちは我先にとレスティさんとムルーの周りに群がり、私と王

子は何となく取り残される。

ふう。すごく長かったような、短かったような時間だったな、と思っていると、王子が、試合中ずっと息を止めていたかのように深い深い息を吐き、そして言った。

「すごい試合でしたね」

「……そう？」

「だって、どちらかにスピードがほんのわずか欠けていても、力がほんのわずか欠けていても、欠けていた方は命を落としていたでしょう。短かったですけど、それだけ本気な……すごい試合でしたよ」

と王子は言う。でもなー私、剣の戦いなんてテレビの時代劇のちゃんなら位しか見たことないもん。よくわかんないよ。

そして さっき以上の大宴会がテントの中で始まった。聞くところによると、何でも、レスティさんという人は草原の民で一番腕がたつらしい。そのお人と同等の腕前を持つっていうんで「やっぱり噂は嘘じゃなかった。すごい、すごい」と、ムルーはさっき以上の人気で……。いやはや。

勿論、「半伝説化してる程の傭兵と同等に戦った！やっぱうちの若さんはすごいぞー」ということで、レスティさんに酒を勧める人だつて多かつただけだね。どーしてこの人は輪から抜け出るのがこんなに上手いんだ？……つまり、また私の隣に来てるんだよね、レスティさん。

レスティさんは場の中心になつているムルーを見つめながら言った。

「いい奴だな、あいつは」

そしてそれからいきなり王子と私の方に目を転じて。

「ムルーが半伝説化していた訳は、実は行方不明だったということ以外にも理由がある。『傭兵のムルー』はある一定の時以前の経歴がまるで不明である、ということだ。砂漠の民の出だと言われているが、それは結局自称だしな」

レステイさんは左手に持っていた杯の中身をぐいと飲みほすと、杯を下に置いた。……それにしてもムルーの経歴ねえ。

「だから気になったんだが、剣を合わせてわかった。素直な、いい奴だな」

そしてレステイさんは、立てている左膝の上に左肘をつくと、その手で自分の顎を支え、目を細めてムルーを見つめた。

そうそう。あんな、上に馬鹿がつきそうなくらい一本気な奴がね（とはいえ、「馬鹿一本気」とは、普通言わないか）、経歴の一つや二つわからないからっていやな奴の訳がないよ。と考えていると、どうやら王子も同感らしく、にこにこしてムルーを見ていた。突然レステイさんは肘を下ろし、王子の方に向き直って言った。

「トーレ王子」

王子はすつと真面目な顔になり、王子とレステイさんの間にいる私もつられて厳粛な気分になって、唇を噛む。

「貴公はこれからどうするつもりなのだ？プリチュ王国を出て」  
王子はほんの少しだけ私を見た。それからはっきり堂々と、力強く言った。

「プリチュ王国の支配下から、ハーレを独立させます！」

レステイさんは王子をじっと見つめて、それから言った。

「勝算は？」

「十分です。ハーレは国力もアップしてるし戦力も……」  
レステイさんは軽く手を振って王子を制すると言った。

「それはわかつている。だがそれは勝因になりえない。前回の敗因を克服していないのだから」

わっその先は言わないでほしいっ王子に自殺されたくないっ。そういう嘆願の目でレステイさんを見上げたのに……くすん。無情なんだから。

「ハーレ王を筆頭に、ハーレ国民は精神力が全く向上していない」  
はつきりきつぱり言い放っちゃった。そのうえ、更に言った。

「だからきつと、ハーレ王は再戦争よりは植民地のままを望むだろ

う。それどころか王子、貴公が帰られても受け入れさえしないかもしれない」

「……失礼します」

王子はふらつと立って、ふらふらつとテントの外へ出て行った……。えーい。私はレスティさんを睨みつけて言った。

「いたいけな子供をいじめてっ」

「王子は 特に独立戦争を起こそうなどと企てている王子は、いたいけな子供であってはいけない。 違うか？」

「それに、ハーレ王が王子を受け入れないだろう、というのも十中八九確かだ。そしてプリチュユ王に捕まるよりは、今のうちプリチュユに帰る方が王子のため、と思う」

そりゃね、確かに王子の事を思って言ってくれてるのかもしれない。でもあと一月もあそこにあのままいてごらん。もしくはここから引き返そう、なんて言うてごらん。十中十、王子は自殺するよ。うー……。

「ほつといて下さい」

「え？」

「国民に気力がないのなら、気力ぐらい起こさせてやるわよっ！」  
またひらきなおっちゃった……と思って、少々自己嫌悪したら、レスティさんは言った。

「お前にならやれるかもしれぬな」

「へっ？」

「お前になら、な。 ムルーがお前に仕えている、と私が思ったのは、お前にそれだけの器を見て取ったからだ」

はあ……？

「んな……私は一介の女子高生ですけど」

「……お前が一介の、なら、じょしこーせーとやらは余程恐い生き物なんだろうな……」

背後から唐突に聞こえた、この聞き慣れた声は……。私は後ろを

振り向いて、その人物を見た。

「ムルー！」

なんで宴会の主役が抜けても、場の空気が変わらないんだ？と思  
って辺りを見ると、みんな酔い潰れていた……。

ムルーはそれ以上私には構わず、レスティさんを見ると言った。

「俺は王子なら国民に気力を起こさせることができるだろうと思  
っていたのだがな」

「ふむ。確かに、お前が惚れ込むのもわかる程に、あの王子は  
賢い。……なのに何故あの一点だけ、ハーレはプリチュに勝てない  
だろう、という点だけはあんなに頑固に認めないのだ？」

レスティさんの問いにムルーが答えた。

「さあ。勝って欲しい、という愛国心が王子を盲目にさせてる  
んじゃないか？」

レスティさんは静かに言った。

「……盲目にさせるようなものなら、元凶を取り去ってしまえばい  
い」

元凶　　というのは、ハーレ王国のことだろうな、やはり。とす  
ると……この人は何を言ってるんだ！？

「この場合は愛国心をつきとおせば済む話でしょ！」  
思わず叫んだ。ムルーが弁護してくれた。

「そういうことだ。それに俺は王子にプリチュの魔の後継ぎに  
はなつて欲しくないし。……だから可能性が低くても、王子がハー  
レの王や民に気力を起こさせることに、賭ける」

一瞬の沈黙。そしてレスティさんは笑いだした。　と…突然笑  
うなよ。驚いたじゃないか。

「三人それぞれ面白いな、お前達は。　お前達がそこまで言うの  
なら、のっしてみるのも一興……。大した事は出来ぬが、協力はしよ  
う」

わ……本当？わーい。

私は立ち上がってお尻をはたくと、

「王子に知らせてくる！」

と言って外に向かった。

出入口にあたる部分のテントの布を少し上げて、外へ出ると、もう暗かった。

相変わらずの見知らぬ星空の下で王子を探すと、二十メートル位先に、こちらに背を向けて座っている王子を発見した。

草を踏みながら、王子に向かって進みつつ考えた。ムルーは王子が、ハーレ王国はプリチュ王国に勝てないであろうということを認めただけだろというのは愛国心のせいだろうと言っていたけれど、本当にそれだけだろうか、と。

だって、本当にそれだけなら、プリチュ王国から逃亡するのは現在までなくたって構わない筈。もう、七年も待ったんだから、今更一月や二月位待てそうなもんだ。

なのに王子は、（放っておけば近日中に私が処刑されただろう、ということもあつたのかもしれないけど）やたらと急いでいる。

焦っているようにすら見える。……なんで？

私は王子の後ろに立ち止まって、言った。

「王子」

王子は振り向いた。その顔に、哀しげな表情を浮かべて。

えーと、こういう時は何を言えばいいんだ？うーんわからん。

「……元気？」

王子はクスツと笑って、

「元気ですよ」

と言った。私は、王子の隣に腰を下ろした。

何となく二人で、夜空を見上げていた。まだ月は一つも出ていない。テントの周りに立て巡らされた松明がなかったらさぞ暗かるう。

「里菜」

王子が突然そう言ったので、私は隣の王子を見た。王子は尚も星空を見ながら続けた。

「以前、僕のためにハーレ王国は植民国となっていて、そんなのはいやだから、プリチュ王国から逃げたいんだと、言いましたよね」  
「……うん」

「それは確かに真実だし、ハーレ王国独立のためなら、この命を賭けてもいい、というのも本心ですが、別の、真実もあるんです」  
王子は相変わらず私の方を見ずに、話を続けた。

「七年前、プリチュ王ロツフがハーレ王国に戦いを仕掛けたのは、彼の世界征服という野望のための第一歩でした。そして今、ロツフ王はそれを再開しようとしています。戦乱期にあるこの世界を平定する必要は、確かにあるでしょう。だけどそれを、現在のロツフ王にやらせるわけにはいかないんです」

「……何で今のロツフ王じゃダメなのかはわからないけど……」  
「それが、プリチュを出て、ハーレに反プリチュ戦争を起こさせようとした、もう一つの真実？」

そう訊くと王子はこっちを向いて微笑むと言った。

「まあ、そうです。だから、ロツフ王の世界征服を阻止するのが第一目標なんだから……。もし父が植民地のままの方がいいと願うのなら」

王子はいったん言葉をきり、視線を下に落として、固く結んだ自分の右手の拳を見つめ、唇をきつく結ぶと、少しずつそれをゆるめて、そして言った。

「僕がこの手でプリチュ王を殺します」

#### 四、手合わせ（後書き）

剣の打ち合い……よくわかりません。  
しかしこの話では今後も出てきません。悩みどころです……。

## 五、追手

「僕がこの手でプリチュ王を殺します」

王子の口から、ついさつき、哀しげに発せられた言葉が、しばらく頭にこだました。

それから王子は、すっと立ち上がると一回だけ私に微笑みかけてそれからすたすたとテントに戻った。私も慌てて後を追った。

テントに入つてすぐ、王子は涼やかにレスティさんに、急に席を立つた非礼を詫びた。

そして腰を下ろしてから、プリチュ王を自分で殺す、という決意の程を表明した。

それを聞いて、レスティさんは、

「ほう」

と言つてにやつと笑った。王子にプリチュ王が殺せるなら、ハーレの国民がどれ程氣力を欠いていたって問題はないわけで、その辺を考へて生まれた笑みだと思ふ。

それからレスティさんは、本当は私が王子に伝える筈だった事を、つまり協力しよう、ということと言った。

王子は静かに言った。

「協力して頂けるんですか？」

「ああ 大した助けにはならぬかも知れぬが、ま、貴公らをプリチュ王の手の者から隠してハーレ城市へ送るくらいのことには」

それだけでも大した助けだと思ふ。

「で、貴公はどうするつもりだ？ 具体的には」

レスティさんの問いに、王子は杯を置き、顔を上げるとまっすぐレスティさんの目を見て言った。

「とりあえずは歓迎されないとしてもハーレに正面から入国します。

そして、父をどうしても口説き落とせないようなら、父が植民地のままを望むなら。その時はプリチュ王国に戻つて、そして」

王子はそれきり黙ってしまったけど、レスティさんにもムルーにも、それから私にも後に続けられるべき言葉はわかっていた……。

えーと、今晚か、明日の朝ぐらいだろうって言ってたっけ、追手に追いつかれるの。

そんなことを考えながら、テントの中で横になっていた。

酔い潰れた人たちがその辺にごろごろ転がっていて、いびきはすごいわ、歯軋りも聞こえるわ……。

でも、それでもなおかつ、今晚がこの世界に来て以来、一番眠る条件がいいんだよねー。

だってさ、来て二晩は牢の中、石畳の上でじかに眠っていたわけだし、次の晩は、川のそばでびちよびちよになって気絶してた。昨晩は前三日よりはかなり良かったけど、それでも草の上に布一枚敷いてその上で寝るといって、野宿だったし。

そんなわけで、今日はゆっくり寝よう。

てーそーのきき、とかいうものは気にしなくても良さそうだし。

何でかというところ、レスティさんが全員に戒めてくれたんだな、手を出したら草原フテスの民の一族として認めない、と。

流浪の民が一族から見放されると、余程腕のいい剣士でもない限り生きていけないんだそうだ。生活の手段がないから。

それにしても、レスティさんが私達にこんなに好意的なのは、王子がロツフ王を殺せると仮定したからだよね。あの王子が殺す

と断言したからには殺すのは可能なんだろう、けど……相手が魔王だっというのがいまいち不可測要素だよな。

魔、か。魔力 この世の力ではないもの、か。

「ま、私にしてみりゃこの世界そのものがいつもの世界と違うもん  
な」

とりあえず、寝よう。ぐっすりと。

「……て下さい……里菜……起きて下さいってば……」

なーにー？私、眠い。寝かせといてよー。

「そんなもんじゃダメですよ、王子。いいですか？……さっさと起きろー！」

キーン。

頭の中でそっぴい音が響いた。のそのそと起き上がって、言う。

「おはよ。今朝もうちじゃないんだ」

いいかげん、いつもと違うところにいる、という状況には慣れた、といえ……目覚める時には、いつも期待してしまう。今までの単なる夢で、私はうちにいるんじゃないか、と。

欠伸を一つ。

「悪いね。私、寝起きがとっても悪いもんで」

「全くだ」

……かわいくねーなっムルルの奴は。

「そんなことより、里菜。聞こえますか？外……」

ん？そーいや言い争ってるみたい。なにになに？

「……ですから、子供連れの三人組を御覧にならなかったかとお尋ねしているのです！」

「しつこい！見ていないと言っていようが！」

うーん、今はレスティさんの声だな。それにしても今の会話は……。

「追手？」

王子がこくんとうなずいた。

「レスティ殿が任せておけ、と言って出て行かれたんですけど……」

ふうん。周りを見回すと、みんな起きてて外の会話に聴き耳をたててる。何かみんな楽しそうね……。昨日のレスティさん

とムルルの試合を見てたときみたいに楽しそう。

どれどれ？

「……ですから三人組を御覧にならなかったかとお訊きしているのですー！」

「見てない、と何度言ったらわかるのだ？」

あん？なんかさつきと内容同じみたい……。

「そんな筈はありません！王子一行は必ずこの辺りを通った筈なのです！素直に答えて頂きたい！」

「何を？」

「ですから！」

あ、むかついたな。見た、と決めつけてるくせにわざわざ、見たか？なんて訊くなっつーの！ あーいう奴、中学ん時いたな。体育の教師！憎ったらしー奴！あーいう野郎はどわいつ嫌いだっつー！！

「そんな筈はありません！王子一行は必ずこの辺りを通った筈……いや、しかし、確かにここにいるにしては早過ぎる……」

おや、やっと会話に進展があつたわ。

「！そうか、さては貴様ら、草原の民に扮してはいるが、ハレの者だろう！計画的に王子を城から連れ出して馬で逃げたな！だとすれば、たった二日で大層な距離を進めたのも頷ける……。とうことはそのテントの中に一行はいるのだな！者ども調べろ！」態度をあっという間に転じたおじさんの命令で、ばらばらと足音がこちらに向かつてくる。あら困った。しかし、こんなこと考えてる場合じゃないと思うが、あのおじさんってすごい……思い込みだけで人に命令してる……。まあ今度ばかりはその思い込みも一部は当たってるわけで……。困つたなあ……。

と。レスティさんがおじさんを制止したようだった。

「待て。確か先程、プリチュ王国の第一隊第七班班長と聞いたように思うが」

「それが？」

「この剣を見よ！ほんのそれ位の身分の者が、草原グレスの民の長の子に妙な言い掛りをつけて、よもやただで済むとは思っていません！」

息をのむような音が聞こえた。

「草原グレスの民の長の跡取り？！こ、この剣の紋は確かに……。し、失

礼しました！お、お許しを！」

「許さぬ！」

ヒュン！という音。ザクツという音。そして、テントの、声がしていた辺りが赤く染まった。

それが合図であったかののように、テントの中にいた草原の民達は狂喜の声をあげて外へ飛び出し、そのテントの入り口の布を上げたままにしていってくれたものだから、しっかり見えてしまった……天然色の血が乱れ飛ぶ現場を。

言葉も、ない。

目をそらすことも出来ない。

人が、死んで、いく。プリチュの兵士たちが、草原の民の慣れた剣技の前に、為す術もなく、倒れていく……。

本当は目をそらしたいと思っている。それどころか、この場から一目散に逃げだしたいとさえ思っている。

だけど、ここで人が殺されていく理由の一端は確実に私が担っている。だって、倒れていく人達は、私と王子とムルーを追ってきた人達なんだから。だからこそ、この現実から目をそむけちゃいけない、と理性が訴え、それで私は目をそらすことが出来なかった。まばたきさえも出来ずに、一所を見つめすぎたせいで目が潤んでくるところにじーっと眺めていた。

わかっている筈だった。王子について独立戦争を起こす手伝いをするに決めた時から。人がどんどん死ぬだろう、と。戦争なんて、人殺しの団体戦みたいなものなんだから、と。

だけど目の前の現実にはけっこうきつくて、わかっているつもりだったただだと私に思い知らせる。

倒れた人達は、最初のうち、少しは動いている。だけど、そのうちにぴくりともしなくなる。今まで、自分で考えて動いていた人が、ただの物体になってしまう。……死ぬ、というのは、そういうことだ……。

わかっていなかった、全然。

人が死ぬところなんて見たこともない。人が殺されるところも当然見たことない。ましてや戦争なんて言葉でしか知らない。

言葉の上での理解しかない人間が、戦争を起こそうとしたところで、やっぱり言葉の上でしかわかってなくて　私は初段階の、人が死ぬという事実ですら、自分でさえわかるほどに蒼冷めていた。

人が、殺されていく。　人が死ぬということがどういことなのか、人が殺されるということがどういことなのか、そして、戦争というものがどういうものなのか、私、全然わかっていなかった。考えてみようとするしなかった。……考えなくちゃいけない。わかっていなかったということがわかったからには、考えなくちゃ、いけない。

「……里菜。大丈夫ですか？」

私のであまりの顔色の悪さを心配したのが、王子が声をかけてくれた。

ムルーは戦を眺めている。

そこに、レスティさんが戻ってきた。血の滴る剣をひっさげて。

「ムルーは出ないのか？」

「ああ。俺が出れば、あんな兵士の十人や二十人、一人で片付く。これはどうやらあなたの民の楽しみらしいからな、譲ってやっただというわけだ。　あんだこそ早々の退散じゃないか」

「私はきっかけを作りさえすればいいのだ。　何しろ私は普通の人間だが、あいつらは血を見ないと生きてられないような奴らで」

「はん。　それで言うと、俺も普通の人間に入るかな」

「らしいな。驚くべきことではあるが」

「うーむ……。　ついていけない会話だ……。　普通の人間ってというのは、大量の血を見た場合に蒼冷めるような人だと思ってたんだけど。蒼冷めてばかりじゃこの世界では生きていけないってことか。」

「……里菜は気分悪そうだな。大丈夫か？」  
とレスティさんが問うた。

「はあ……まあ、私はせんさいな人間なもので……」

私の 普通 はここでは 繊細 くらいだろつと思つてそつ言つたら、ムルーが言つた。

「嘘つけ」

……かあいくないっ！

五、追手（後書き）

初の人死に。

## 六、一角獣ヘラオス

考えなくちゃいけない、私は。人が死ぬ、ということ。戦争というもの。そうして、私はどうするべきか、ということ。

追手をやっつけたからといって、ゆっくりしてるわけにもいかない、ということ。さっさと朝食が始まった。私はちよつと、あんなシーンを見た後だけに、食べる気にならなくて、人が御飯を食べている間、考えていた。

戦争なんて、起こしていいんだろうか？　いいわけではない。これは私が所属していた世界の常識。でもここはそこじゃない。その常識じゃ測れない。

……戦争を起こさなかったら　プリチュウ王が世界征服を始める。世界征服をやめさせる　これはきつと正しい。でもその手段として戦争を用いるのは……正しいんだろうか？

そもそも、私は人を殺せるんだろうか？

「里菜」

御飯を食べ終わったららしいレスティさんが、声をかけてきた。

「馬の様子を見に行くのだが、少々付き合わぬか？」

馬？　あ、そういえば一角獣がいるんだっ！あれは是非もう一度見たい！

というわけで、まだ御飯中の、王子やムルーや、他の草原の民の皆様方において、私達は馬を見に行った。

お馬さん達は、テントの裏手の木々につながれていた。でも一角獣さんがいなかった。どこだろう？と思っときよろきよろしていたら、一角獣は一　メートル位離れた丘の上において、遠くを眺めていた。

陽を浴びながら、まっすぐに立っているその優美な姿に、私は見惚れた。……なんて綺麗な生き物だろう。

私の隣に立つて、同じ様に一角獣を見ていたレスティさんが、  
「レイ！」

と呼び掛けると、その一角獣はこちらを向き、レスティさんを認めると、丘を駆け下りてきて、レスティさんの側で止まった。走る姿は、更に綺麗ななあ……。

近寄ると、馬というものがけっこう背が高いことがわかる。乗るところが私の目の高さ位。地球の馬もそうなのかなあ。テレビとかで見たことあるだろうけど、わからないものだな……。

レスティさんがものすごく優しい顔をして右手を差し伸べると、一角獣は首を曲げて、角をその手にすりよせて、すごく倅せそうな顔をした。

妙に入りこめない雰囲気、黙って見てたら、レスティさんが話しかけてくれた。

「里菜。一角獣を見るのは初めてだろう？これは今では数少ない生き物だから」

一角獣とラオスが重なって聞こえるんだから、一角獣はここではラオスっていうんだろうなあ。

「まあ私は、馬さえも初めて見たようなものですし……」  
と答えると、レスティさんは心底驚いたという顔をした。うちの世界では交通手段は馬じゃないんだもん。

「これはレイルギーナという名で、私の持ち馬だ。草原の民の馬は元々その辺の馬よりも脚力があるが、一角獣は更にパワーがある。ただ、近年数がめっきり少なくなっただうえに、草原の民にも一角獣に乗れるだけの力量のある奴が減ったので、一角獣を乗馬にしている人間はほとんどいない」

と、レスティさんがレイルギーナ君の紹介してくれた。うーん、綺麗な奴だ。さわりたい……。  
レスティさんが言った。　　と思っていたのが通じたのか、

「元来は気が荒いが、私が側にいる時なら平気だ。さわってみるか？」

で、首を曲げた状態のレイルギーナ君に触らせていただいた。首の辺りと、その後ろのたてがみの辺り。たてがみは、なんていうか、ふかふか？一本一本はけっこうかたいんだけど、まとまると何かふかふかというかふわふわした感じ。

「他の馬はつないであるのに、レイルギーナは放し飼いなんですか？」

と訊くと、レステイさんはクスツと笑って言った。

「レイは我が友、我が半身。つなぐ必要など全くない」

そしてレイ君をなでる。何か、妙に幸せそうなカップルだな

あ。（これはカップルとしか言い様がない）

「ところでわざわざ王子達と引き離してここまで連れてきたのは、何もレイを紹介するためだけではなく、少々訊きたいことがあったのだが」

とレステイさんが真面目な顔になって言った。手は相変わらずレイをなでていたけれど。

「何ですか？」

「プリチュの兵士達を殺した時のことだが」

あ、いかん。一角獣にかまけて忘れてたわ、考えなきゃいけないことを。

レステイさんは続けて言った。

「仮にお前が繊細なタチだということを認めるとしても……」

……レステイさん、その言い方って何かしら……。とてもせんさいとは思えないって言いたいのかしら。

「あの蒼くなりようは尋常じゃない。もしかして人が死ぬのを見るのは初めてか？」

まさにその通りだったんで、コクンと頷くと、

「お前の生国は、余程幸せな国と見えるな。それにしても……」

レステイさんは呆れたような声で、続けた。

「そんなで戦争を起こすつもりか？」

私は答えた。

「こんなで戦争を起こすつもりだったんですよ」

一瞬の沈黙。そしてレスティさんが言った。

「……過去形だな」

「認識がすごく甘かったというのは、さっき重々実感しました。私は……戦争つてものを、人が死ぬつてことを、理屈でしかわかってなくて……だからこそ、王子が独立戦争を起こすのの手助けをするなんてことを、安請け合にしちゃって……」

レスティさんは静かに言った。

「……それで？安請け合いだっただということがわかって、それでどうするつもりだ？」

そう。どうするのか。それが一番の問題。

「……悩んでるんです。戦争の是非とか、私に人を殺せるか、とか。でも考えて答えの出ることもなさそうだし」

この世界についての私の情報は、すごく少ない。でもとりあえず、思い出せる限りのことを思い出してみよう。

トール王子。ムルー。プリチュの魔王ロップ。運良く、王子が私に興味を持ってくれなかったら、今頃はなかった命かもしれない。何が出来るか、わからない。どうなるのかもわからない。ただ……。

「王子と、行きます」

口に出して進む方向を決めたら、少しすつとして、先を続けて言った。

「人が死ぬのを見てられるかなんてわからないし、戦えるかもわからない。足手纏いにしかならないかもしれない。だけどほかに行く道もないし」

レスティさんが、レイルギーナを見つめながら言った。

「中々、予想通りの、答えだな。ムルーもそうだが、あの王子には何か、人をひきつけてやまないものがある。だからこそ魔王もあの子を欲しがったのだろうが」

レイから目と手を離して、私を見て、レスティさんは更に言った。

「ただ、このまま王子についていくつもりなら、一つだけ覚えておけ。戦うことに意味などない、重要なのは何の為に戦つか、だということ。」

何の為に戦つか　？その問いの答えは、今のところ見付けられなかったけど、その言葉は頭の中で何度も何度も繰り返され、しまいは心の底に沈んだ。

## 六、一角獣ヘラオス（後書き）

昔、この部分を書いたより後に、馬の高さを知りたくて、乗馬体験コースに行った事があります。乗るところが目の高さ位、というのはその時の経験を基に書き足しています。

いやーあの乗馬体験は……落馬まで体験して貴重な経験になりました……。

## 七、移動（前書き）

……サブタイトルにかなり苦労しているのが我ながら見て取れます  
……。

## 七、移動

皆の所に戻ると、食事は既に終わっていて、みんな、片付けたり、出発の用意をしたりしていた。ムルーはテントをたたむ手伝いをしていて、王子は自分のとムルーのと私のと、三人分の荷造りをしていた。何か、王子とかがっていうと、おぼっちゃま育ちで何もしないような気がするんだけど……働き者だよなあ、この王子さまは……。

レスティさんは草原の民の人と話し始めたので、私は彼から離れて、王子の横に座り込み、一緒に荷造りをした。

「里菜」

と王子が言った。

「何か すつきりした顔をしていますね。……良かった」

そう言って、につこり笑った王子の顔は晴れ晴れしくて、心配させてたんだなあ、と反省すると同時に、ちよつとどきつとした。

『あの王子には何か、人をひきつけてやまないものがある』

これはレスティさんの台詞。だけど私もそう思う。王子の輝かしい瞳は、きつと天性のものだね。私がつとえ、王子に助けられたんじゃないかったとしても、私は王子についてきたんじゃないかなって気がする。ムルーが王子についてきたみたいに。

あつという間にテントは片付けられ、そしてレスティさんが言った。

「出立するぞ！行き先は ハーレだ」

ムルーは馬を一頭借りて王子と乗った。王子もちゃんと一人で乗れるんだけど、馬の数の都合で相乗りになったというわけ。

私は何と、レスティさんと一緒に、一角獣ライオスのレイルギーナに乗せて頂いているのであった。じいやさんが「身分もわきまえず！」って感じで睨んでる視線が痛かったけど。

王子から聞いた話だけど、一角獣は誇り高き獣で、自分で認めたい人しか、その背には乗せないらしい。私が乗せて頂いてるのは、レイが認めた人であるレステイさんがレイに「お願い」してくれたからなわけで……。いやはや。つくづくすごいものに乗せてもらっているなあ。

しかし、走っている馬に乗っているのは、ど迫力。ジェットコースター並のスリルがある。スカート姿だから、横座りよりほかにしようがなく、その体勢でレイ君にしがみついている。私の後ろにレステイさんが乗っていて、手綱を握りがてら、私を支えてくれてるんだけど、それにしたって、ちょっとこわい。私、馬に乗ったの初めてだもんな。バイクにも乗ったことないし。自転車とは比べものにならない速さで風が後退していく。はっきり言って、痛いわ。

「里菜」

レステイさんが後ろから叫ぶ。

「慣れたか？」

つて乗馬に？うーんと、

「ええまあ」

「それなら とばすぞ！」

いつ今まではとばしてなかったっていうの？びえ〜〜！！

で、その日の午前中は休憩なしでひたすらぶつとばし 早めの昼食とあいなつた。

さつとレイ君から飛び降りたレステイさんの手を借りて、ラオスから降りる。

ぐたつ。つ、疲れた 。も、お昼いらない……。お尻は痛いし

……。

「随分、ばてたようですね、里菜」

座りこんでる私を見て、王子がそう言った。

「……王子は元気だね」

「久しぶりの遠乗りでむしろ気分が良くなりました」

あら、そう……。

「里菜。気分悪そうだが、無理にでも飯は食え。お前、朝も一口も食べてないだろ」

あら知ってたの、ムルーさん。

「まあしかし、初心者にしては頑張ったじゃないか。里菜がいるからどうかと思っただが、かなり進めた。この分だとぼちぼちハーレ国内の人家が見え始める。で、食後、三時間もとばせば、ハーレ城市だ」

「本当に?!」

レスティ氏の言葉に、トーレ王子は歓喜した。

「ああ」

ということは、また馬に乗るのね……。下手に胃にももの入ると、吐きそうな気もするが……。うーん、しょうがない。御飯を食べよう。

バクツ。ムシャムシャ、バクバク、ゴクン。

「里菜……。何か、意地になって食べてませんか？」

……。当たりです。

しばらくの食休みの後、レスティさんが言った。

「出発する！乗馬しろ！」

それで私も腰を上げて、荷物をレイルギーナにくくりつけようとした。

そうしたら、レスティさんがふと気付いたように言った。

「里菜。そろそろ人家があるから、その髪は少々まみすいぞ」

髪？ 言われて思わず、左手を自分の髪の中にうずめた。

そういえば今日は朝から髪の毛隠すの忘れてた。

というわけで、レイにくくりつけかけていた荷物をもう一度手にとって、中から布をだそうとしたら、レスティさんが再び口を開いた。

「昨日かぶっていた布をかぶるつもりか？」

ほかに布持つてないから頷くと、

「普通、かぶり布にするのは、ハーレ織程度の厚地の布だぞ。昨日かぶっていたような薄地の布では不審の元だ」

ふうん。じゃレステイさんが昨日、私の頭に目を止めて、いきなり布を剥いだのもそれを変に思ったせいかな。

「でも、布、ほかに持つてないんだけどなあ……」

と思わず呟くと、レステイさんはおもむろに自分のマントを止めていた紐をシュルツと抜くと、そのマント布を私に向かって放った。

その布は、私の頭の上からばさつとかかったので、私は一瞬視界を失い、慌ててそれをどけた。その時には既にレステイさんはマントなしで馬上の人となっていた。うーん、行動が素早い。

で、レステイさんに向かって訊いてみた。

「レステイさん？」

と。その答えは、

「その布は一応ハーレ織だからな、それでもかぶっている」

というものだった。それでかぶってみると、その布は、重みがある分、昨日の布より頭に馴染んだ。どうやら確かに、かぶるにはこの布の方が適してるようだ。

ただ問題は、レステイさんの布を借りてていいのかなってことなんだよね。貸してくれたんだから借りてていいんだろうとは思うけど、じいやさんの視線が余計痛くなったような気がする……。

痛い視線を背中に感じながら、レイの背に荷物をくくりつけ終わると、レステイさんが、

「支度、出来たか？じゃあ」

と言って左腕を差し出してくれた。

「あ、どうも」

言いながら私はレイの上に引つ張り上げてもらった。よっこらしよのどっこいしょつと。何とかレステイさんの前におさまる。そして。

「出発！」

レスティさんの声で、草原の民は速やかに移動を開始した。

## 八、ハーレ城市

レスティさんが言っていた通りに、移動を再開して間もなく、人家がぼつぼつと出現した。

私ってばプリチュの街中とか村落とか、一つも通らずにここまで来たわけで、つまりこの世界の人家って初めて見たわけだけ。何というか　まるっきり日本じゃ見かけない家！だって木造じゃないし。材質何かな。ちよつと茶色っぽい石みたいなの……煉瓦かなそれが組み合わさって家が出来てる。家のまわりには畑らしいものがある。で、畑仕事しているらしい人がいるんだけど、その人達って私達が近くを通ると、例外なく皆こつちを見て、物珍しそうに眺めてるんだもん。その度に私はもしや髪の毛が出るんじゃないかとひやひやしていた。　　後で訊いたら、草原の民が人家の傍に来ること自体、珍しいことだかららしい、とわかったけど。

そのうち、人家は少しずつまとまりのある固まりとなって出現するようになった（つまり村落）。更に進むにつれて、村落と村落の間の距離が短くなり（つまり村落の数が増えてきた）、一つの村落の大きさが段々大きくなり、街、と言つてもいいような感じになつてしばらくした頃。目前にやたらでかい城壁がそびえたっていた。

その城壁の手前で、レスティさんは一角獣ラオスを止めた。後に続く面々もそれにならって馬を止めた。

レスティさんはレイから降りると私を降ろしてくれて、右手でコツンと城壁を叩くと、言った。

「この中が、ハーレ城市だ」

ふうん。そうなのか。ハーレ城市　つまりハーレ王国の首都。

ハーレ城の城下町。ということはこれは正しくは城壁ではなくて市壁なんだな。

私はあらためて市壁を眺めた。

見たことないけど万里の長城ってこんなんじゃないかな、と

思えるような長い、遙かに続く壁。高さは多分六〇七メートルはある。

思わず、ため息をついた。

付近住民らしい、緑系の髪の人々が、遠巻きにこっちを見ていたけれど、レスティさんは気にもとめていない様子で王子に向かって話し掛けた。

「ここから、五分も歩けば南大門だ。我々はここで帰るが……」

「色々と 有難うございました、レスティ殿」

と王子が言った。

「 私は、自分のしたいようにしただけだ。礼には及ばない」

「……」

「貴殿も、大変なのはこれからだぞ。貴殿が失敗すれば、ハーレ王国と心中することになる」

王子は、瞳に強い光を宿して答えた。

「わかっていきます」

丁度そこに、馬を元の持ち主の所に返してきたらしい、ムルーが現われた。ムルーは手に荷を持っていた。 そうだ私も荷物を下ろさなきゃ。

というわけで私がレイに向かっている間、レスティさんとムルーが話をしていた。

「ムルー、この魔王相手の勝負にお前達が勝ったら」

「勝つさ」

「 そうしたら二人で酒でも飲もう」

「ああ」

ふむ。男の友情とでもいうべき代物かな。

レスティさんは私がレイから荷を下ろしたのを見ると、レイの上に乗って、来た方向へと向きを変えた。

途端、私は頭の上のつかっている、布のことを思い出した。

「レスティさん、この布 どうしよう?」

「かぶっている」

「でも……」

借りっぱなしじゃ悪いよね。 今度いつ会えるのかすらわからないんだし。

レスティさんはレイを歩ませて、私の脇を通る時に呟いた。

「じゃ 近いうちに返してもらいに來る」

え？ 多分、私にしか聞こえなかったと思う。そのくらいわずか、けど、だけははっきりした声だった。

「出発！」

レスティさんの声で、草原<sup>ブテス</sup>の民達はさっさと元來た道へと走りだして行つた。誰も一度も振り返らずに。

私達は彼らが見えなくなるまで彼らを見送つた。

「さて」

と王子が言つた。

「行きましようか」

周囲の人々の視線は、相変わらず私達に注がれていて（そりゃーねー、こんな風に怒涛のごとく馬で送迎されてきた人間は珍しいんでしょう）、それに気付いてないかの様に平然と歩きだせる辺り、すごいな、と思う。王子もムルーも。

二人につられて歩いてはいるけど、一般女子高生には万人の注視の中、スムーズに歩くなんて、至難の技だ。

なのに人の気も知らず、二人は南大門に向かってスタスタと歩を進めた。 会話をしながら。

「ムルー。僕は正面から入国する、と言つたけど、そして實際、国には既に入つてるけど、ハーレ城市に入るにはまるっきりの正面から『トーレが來ました』って言つたんじゃないや無茶だと思う。多分、プリチュからの伝令、既にハーレに來てるだろうし。

で、最低でも父上の面前までは行きたいから……」

「わかりました。俺の名を出して入りましょう。 波風たてないためには一番いい手でしょうし」

と、王子の台詞を奪つてムルーが言つた。王子はコクンと頷いた。

台詞を最後まで言わずとも、お互いわかっちゃう辺り、本っ当に気の合った主従関係だなー、と私は感心した。

そうして、後は南大門まで私達は一言も話さずに歩いていった。

## 八、ハーレ城市（後書き）

里菜は万里の長城を思い浮かべましたが、実際には中世ドイツとかの市壁のイメージです。

これを書いたより後に、ドイツのロマンティック街道バスツアーに参加して、（多分）ローテンブルクの市壁の中歩いたりしてきました。乗馬体験とは違って、こちらは別にこの話のために行ってきたわけじゃないですが、歩いている時にはやっぱり思い出していました。

## 九、門

「止まれ！」

南大門の両脇に立っていた兵士が、持っていた槍を交差させて、私達の行手を阻んだ。

「どこの者だ！名と、用件を言え！」

ムルーはたじろぐ様子もなく、一歩進み出て言った。

「俺は砂漠アベリの民の出で傭兵のムルー。所用あつて王に謁見を願いたい。後ろの子どもと女は俺の連れだ」

「砂漠アベリの民のムルー？」

兵士の一人はそう呟くとギラツと視線を順々に私達三人に巡らせた。

それから顔色をスツと変えて、隣の兵士と相談し、更に門の横の兵士の詰所になっているらしい所から人を呼んで、ひそひそ話し合い、それからやっとこつちを向いて叫んだ。

「しよ、少々お待ちを！」

そして数秒後、兵士が一人引つ込んだ、と思つたら門の向こう側をパツパカパツパカすごい勢いで馬を走らせて行くのが見えた。

どこかに伝えに行った、と見るのが妥当かな？

残りの兵士はものすごい眼つきで私達を監視していた。うーん、これは……。

「やばい、かな」

とムルーが呟いた。それから三人で円陣　うーん、三角陣、を組んで、見張りに聞こえない様にぼそぼそと話し合った。

「ロツフ王が王子がいなくなったことをハーレに伝令するなら、同時にいなくなった囚人とその囚人の番兵も、ついでに指名手配するでしょうね、王子」

とムルーが言っただけ、考えてみれば当たり前だ。だって今朝の追手のおじさん「子ども連れの三人組」を見なかったか、って言うて

たもん。三人で団体行動をとっている、と完全に目されてる、ということだよねえ。

王子がため息をついて言った。

「でもまあ仕方ないよ。確かにこれが最上の方法だったんだから。

僕が表に立つたらもつと確実に波風たつたらうし、里菜に表に立つてもらったら……波風たつ以前に、言葉通じないし」

あ、そういうえばそうだった。

「じゃ、まあこのまま待つしかないってことですね」

ムルーはそう言って軽く門柱に寄り掛かった。

門は石が積み重ねられてアーチ型になっていて、アーチの部分は幅が二・五メートル、高さも同じくらい。上の方に鉄格子が見えていて、何かの時にはあれが下りてくるんだな、と難なく想像できる。その上も石が積み重ねられていて、周りの壁と同じ高さになっている。

壁と門の間には門柱があつて、でかい円柱で、壁や門よりも更に高くそびえたっている。その門柱の中が兵士の詰所になっているらしく、更に門柱の上が見張り台になっているらしい。

はあ。思わずため息をついてしまう位重厚な造りだ。

ため息をついているところに、パツパカパツパカと馬が兵士を乗せて戻ってきた。今度は馬四頭、人四人。おまけに増えた三人つて今までの兵士と鎧の感じが違う。

「プリチュの、兵士ですね」

王子が私の隣で呟き、身をかたくした。ムルーはすつと門柱から離れ、私と王子を庇うように前に立った。腰元の剣の柄に手を置いて。

プリチュの兵士は馬から飛び降りると、つかつかと無造作に門の下を通過し、ムルーの前で足を止めた。

「兵士ムルー！今では我がプリチュ王国の正規の兵士である貴殿が、何用あつて国を抜け出し、このような所にいるのか、聞かせてもらおうー」

ふむ。ムルーの正面に立って、喋りまくってるこのおじさんが、この三人の中で一番のお偉いさんらしいな。しかしこのおじさん、私より背低いんだもんなー。ムルーに噛み付いてる姿なんて、まるつきり大人と子供で、笑える状況じゃないけど、笑える……。

「更に！背後にいるのは我が国の王子、トーレ殿下と、処刑が決まっていた囚人に見えるが一体どういうことか！」

う。はつきり言って、考えごとしてる場合じゃなかったんだよね。ぼけっと考えてたりするから、おじさんの合図で後ろに立っていたプリチュの兵士のお兄さんの一人が、私の方に歩み寄って来るのを確認するのがちよつと遅れて、そのせいでよけるタイミングを逸して、頭の上の布を剥ぎとられてしまった。

白日の元に曝された、私は結構気に入っている、私の黒い髪の毛は、周りで恐る恐る様子を窺っていた、ハーレ王国の皆様にはいたくお気に召さなかつたらしく、布が剥ぎとられてから、ぼそぼそとささやき声が聞こえた。

「闇だ……」

「闇色の髪の毛……」

「魔だ……」

「魔に違いない……」

そうして背後で、人が、潮が引くようにいなくなっていくのを、私は感じた。

えーい、要するに、異端なものは何でも魔なのね！あんだ達には！最初ムルーに魔扱いされた時にも頭にきたけど、いま思えばまだムルーの方が、私を魔扱いする理由があつたぞ！ と、心の中で叫んでいたら、ふと気付いてしまった。プリチュのロツフ王も髪が黒いから魔だろう、とは言わなかったことに。

私が、また考えている間に、事態はまた進展していた。つまり、おじさんが、

「遺体であっても構わぬから、王子だけは連れ帰れ、との王の仰せなれば……」

などと言つと同時に、剣を抜いてムルーに討ちかかった！

そして一人のお兄さんは王子に、もう一人の、私の頭の布をとつたお兄さんは、その布を投げ捨てると、猛然と私に向かって討ってきた！

わー！！私や剣なんか使ったことないんだぞ！完全に初心者なんだぞ！どーしろっていうんだよ~~~~~！！

## 九、門（後書き）

第二章完了です。

昔、自費出版した時の本は、この第二章までが前編として一冊でした。

なんとという極悪非道なところで切れていることでしょう。

しかもその後続きを出していない……（汗）。

## 一、流血（前書き）

サブタイトル通り、流血沙汰があります。

## 一、流血

多分、相手が布を捨ててる時間があつたから、間に合つたんだと思う。ムルーが以前渡してくれた剣……一応腰に吊しておいたその剣を抜いて、相手が振り下ろした剣を受けるのに。

それから後は無我夢中。相手が振り下ろしてくる剣に向かって、必死で剣を出して受ける、その繰り返し。

向こうが鎧なんか着て、おまけに盾なんか持つてるのに対し、私はすぐにも破れそうな布の服一枚。剣で受けでもしなきゃ、怪我するのは必至。

だから一生懸命一生懸命、剣を出していた。何せ私は、剣なんて木刀すら持ったことない人だし、本当にそれで精一杯だった。初めのうちは、よく全部受けているものだと思つて感心すら、した。

だけどそのうち、慣れてきたのか、相手の隙が見えるようになった。でもそれでも攻撃なんか出来なかつた。包丁よりも切れ味のよさそうな刃物を持って、人に向かっていく、その結果を考えたら、怖くて足が進みやしなかつた。

と、いうよりも、むしろ、相手の隙が見える程の余裕が出来たからかえって、攻撃できなかつたのかもしれない。本当に殺されそうで全然余裕がなかつたら、死にたくなくて思わず剣を振り下ろしていたかもしれないけど……。

ムルーはおじさんをさつさと片付けて、王子の善戦してたけどさすがに子供だからね、危なかつたの。手助けに行く途中、私の状況を見て取つたらしく、叫んだ。

「馬鹿野郎！守ってばっかじゃいつかはやられるんだ！」

うわーん、そんなこと言つたつて……！と思いつつ改めて自分の対戦相手に向き直り、そうしたら相手と目が合つてしまつて怖かつた。背筋を冷たいものが駆け上つて、頭のとっぺんまで通り抜

けていったような気がした。その位、本当にぞつとした。だって相手の瞳は、何かを見ているとはとても信じられない位、虚ろだった。生者の瞳じゃないよ、これは！死者の瞳だ。

怖くて、怖くて。私は一瞬、凍りついたように動けなくなった。

素人相手にかすり傷さえ負わせられないような人間でも、兵士は兵士。その隙を見逃す訳もなく、ここぞとばかりに剣を振り下ろしてきた！

「里菜！！！」

王子が　ムルーが助け船を出したんで暇になったのだろう、私の戦いぶりを見てたらしい王子が、そう叫ぶと私とその相手との間に割って入ってきた。

ヒュンツ！　　剣が空気と王子の左腕を切り、王子の腕から鮮血が迸った。

「王子！！！」

ドクン。　　心臓が疼く。

王子の体がグラツと傾げて、地面に倒れ落ちる。近寄ろうとしてしゃがみかけたら、敵さんが再び襲ってきたんで、とりあえず右手で持ってた剣を振り上げたら、当りどころがよかつたらしく、敵さんの剣が飛んでいった。敵さんは慌てて剣を拾いに行った。それっ今のうちだ！

しゃがみこんで、言う。

「王子っ大丈夫！？」

王子は寝っころがったまま、

「　　っ……大丈夫、です」

と言った。口調がはつきりしてたんで、ほっと一息ついた。

　　ただど左腕からはどくどく血が流れていた。　　これは私のせい。私が躊躇なんかしてたせい。

　　くっそー、しっかりしろ、松浦里菜！王子の、助けをしたくてついてきたのに、私のせいで王子を怪我させてりゃ世話ないじゃないか。

『重要なのは何の為に戦うか、だ』

レスティさんの台詞がふと頭に浮かぶ。

答えはもう、出てたんだ。王子と一緒にプリチュ王国を逃げ出した時に。戦いたくなくて 自分の手を汚したくなくて、気付かないフリをしてただけ。

『何の為に戦うか』

呪文みたいに、もう一度頭の中で唱える。それから王子の上半身を起こして、座らせておいて（止血してあげたいけど、その暇なさそうだし）、私は言った。

「王子、見ててね」

立ち上がると敵さんは剣を拾って走り戻ってくるころだった。さあて。

キユツと剣を両手で握り締める。片手で持つにはちよつと重いんだよね、これ。それにどうせ剣なんて使ったことないんだから、よく見てただけマシかもしれない、ちゃんばらの真似をしてやるつ。

左腕に盾をつけて体を守り、右手で剣を持って向かってくる敵さんをじつと睨み、その剣に向かつて、両手で力一杯私の剣を振るとラッキーなことにガードが下がったので（ボクシングみたいな言い様だな）その機を逃さず、剣を右から左へスライドさせる。当たったところは相手の首だった。

コマ送りしてるみたいに、画面が一つ一つ流れていく。

首から血を噴き出して倒れていく人。

その血を流れさせた剣。

その剣を持っている手。

その手は 私の手。

私の手は 返り血で濡れていた。服も 血で染まっていた。

これは私の決めたこと。そしてきつと、この一太刀は私がこの世界で生きる為の第一歩。私が今までいた世界の常識が通じないこの世界で生きる為の。。。

そうは思っても……何だか泣きたいような気分。何か「切ない」

ような気がする……。何が切ないんだか、うまく言えないけど、何となく切ない……。

「里菜？」

心配そうな顔をした王子が、下から私の顔を覗き込んできた。私は、王子の顔を見た瞬間、泣きたい気分が倍増して、涙なんか見せずに済む様に、目をつぶった。

優しく、強くて、脆そうで、賢くて、穏やかで、激しい、よく考えてみればまるでわけのわからないこの王子の為に、私は動くこと決めたんだから。

私は一回、目をきつくつぶって、それから目を開け、なるべくにつこり笑いながら言った。

「この剣、ちよっと重いね」

私のそれはちゃんと笑みに見えたらしかった。王子がほっとした顔で、周りが明るく見えるほどにつこりしたところを見ると。

私は剣を鞘におさめてから、言った。

「止血しなくちゃね、王子」

そうしたら、王子はきよとした顔で、

「えっ？ もう止まっていますけど？」

と言った。それで今度は私がきよとした。

「へっ？ だって血、噴き出してたじゃない？」

「でも止まっていますよ。ほら」

と言って王子が見せてくれた傷は、本当に血が止まっていた……。うーん……。何か変な気もするけど、早く治るにこしたことはないんだから、いっか。

その時、ムルーがもう一人の兵士を倒した。……。あれ結構、手間かかったんだなあ、ムルーにしては。相手も強かったのかな。その相手に結構善戦してたんだから……。王子って、強いんだなあ……。そうしみじみ思ってから、地面に投げ捨てられた拳銃、血染めになったレステイさんのマントを拾って畳んだ。

目の前ではムルーが、人二人分の血を吸った剣を盾に、門番して

たハーレの兵士達を脅していた。

「トール王子と傭兵ムルー、その他一名！至急王にお会いしたいと、お取り次ぎ願えるかな？」

そりや言葉遣いは優しかったけど、あれは間違いなく脅しだよ。その証拠に兵士さん、自分の髪の色より蒼冷めて、すっ飛ばのようにもう一度馬に乗って、走り去って行ったもん……。

その兵士が帰ってくるまでに、以前ムルーが持ってきてくれた腕時計によると、四十分かった。

彼は、馬から下りると、ゆっくりこっちに向かって歩いてきて、言った。

「王がお会いになるそうです。どうぞ」

それでやっと、私達は南大門を通過して、ハーレ城市に入ることになった。成功した。

時に 左腕にはめた腕時計によると、三時五十分のことだった。

## 一、流血（後書き）

実に書きづらい部分でした。安易に人殺しなんてしちゃっていいものやらと。

安易とは言いましたが、書いた当人も里菜も安易のつもりはないです。そこから辺の里菜の葛藤を書き込みたかったのですが……書いているのか。さて。

## 二、謁見

南大門をくぐってから、道はずーっとまっすぐだった。

この世界へ来てからこつち、やたらめったら良くなつたらしい私の目には、その道がずーっと先にあるもう一つの城壁の、門らしき所まで続いているのが見て取れた。

兵士、ムルー、王子と私、その後ろにもう二人の兵士、の順で石畳の上を歩いていく。道の両脇はずっと、家とか宿、店などが立ち並んでいて、人々が物陰からこそそこそこちらを見ていた。

どうやら私つてば、ここにきてから耳も良くなつたらしく、陰口がすっかり耳に入ってきた。ま、陰口の内容は想像に難くないでしょう。ふんっだ。いいもん、闇色の髪も闇色の瞳も私は気に入ってるんだもん！魔物なんかじゃないもん！ふんっ！

思わずいじけながら、三十分位歩いた頃、十字路に出た。それを突っ切つて、更に十分くらい歩くと、いきなり左側だけ視界がひらけた。つまり、左側だけ建物が何にも建っていないかった。そしてその空地（？）には石が敷きつめられてあつた。……どうもここは広場らしかった。

そして広場が終わると、そこが第二の城壁だった。

そのこの門も、南大門と大体同じ造りになっていた。多少サイズは小さかつたけど。

その門の番兵には、もう話がついてたらしく、兵士は軽く会釈をただけでその門を通過した。勿論、私達三人と残りの兵士も続いて通過。そして、ハーレ城をまのあたりにした。

ハーレ城はプリチュ城と同じ石造り。同じ石造りでも色々違うんだろうけど、プリチュ城の中で、大抵目隠しさせられてた私にわかるわけもない。

うん、でも石造りの建物、しかも城なんて、そうそうお目にかか

れない代物だから、よく見とこ。

というわけできよるきよるしてるんだけど。我ながらすごい心臓だと思う。だって城内に入ってからというもの、見張りの兵士が増えて、四方八方を槍持った兵士達に囲まれているというのに（おかげで城の様子がよく見えやしない）この態度だもん。私ってやつぱり開き直るタイプなんだなー、としみじみ実感。

でも、この兵士達ってびくびくしてるんだもん。思わず図々しくもなる。ま、ムルーに対しては、自分の剣とか槍の腕なんて到底かなわない、と知っててびくびくしてるんだろーし、王子に対しては、何せ元々は自国の王子だから、扱いがわからなくてまごまごしてるんだろーし、私に対しては、へっへっへっ、何てったって 闇の魔物 だもんねー、おどおどしてる。ふんっ。

そうして連れていかれた部屋は、謁見室らしかったけど、そこには扉がなかった。あとで聞いたところによると「万人に開かれた部屋」だから、なんだそーだ。

部屋に入る前に、御前だ、ということと武器を没収された。没収ってたって、普通は退出したら返してもらえるそうだけど、ね。さて私らの場合、返してもらえるか否か。

そして部屋に入ると、奥に玉座があつて、こちら側と玉座とを仕切るカーテンなんてものなしで、王と王妃が座っていた。

「父、上！母上！」

小さく王子が呟いた。

「トーレ……！」

思わずそう呟いた王妃は、王に諫められた。　　ということとはやはり、王は王子を自分達の子として迎え入れる気はない、ということとだろーうな。ふう。

王妃は目に涙をためていた。

王と王妃の後ろにはいかめしい顔をしたおじさんが八人、座っている。

右腕に重みを感じて、そちらを向くと、王子が私の腕につかまっ

て、傍目にはわからぬ程度に震えていた。振動が、腕から伝わってくる。

「……王子？」

と私が言うと、王子ははっとしたように私の方を見て、腕を離し、そして言った。

「ごめんなさい、大丈夫です。有難う」

そうしてきつと前に向き直る。で、思わず私は王子と手をつないでしまった。私が「……王子？」と訊いたのは、別に王子が腕をつかんだことを責めたわけじゃないもん。もし、私の腕をつかむことで少しでも立っているのが楽になるのなら腕ぐらいいくらでも貸す。

他に何にも手助けできないから……。

「砂漠の民のムルー。そなたを迎えるのは二度目だな。先刻の、プリチュ王国の使者によると、貴殿は現在プリチュの兵士であるそうだが 私に用、とは一体何だ？」

トーレ王子の実の父君、ハーレ王が、ことさらにトーレ王子を無視して、ムルーに言った。そりゃ私達は、ムルーが王に用があるという名目で入城したんだから、形式的にはそれで正しいんだろうけど……。

「ハーレ王。正確には用があるのは俺ではなく、こちらのトーレ王子だ。話はトーレ王子から聞いてくれ」

とムルーが言った。それでやっと王はトーレ王子の方を向いて、震える声で、それでもきっぱりと言った。

「プリチュの王子殿下 この国にはどんな用でお立ち寄りだろうか」

王の子として ハーレの王子として受け入れてもらう希望を完全に打ち砕かれて、王子は少し哀しそうに顔を歪めた。それでもすぐに、私の手を離して、一步前に出て言った。

「ハーレ王。僕はもうプリチュの王子ではありません。ただの亡命者、あるいはただの旅人です。そしてただの旅人として貴方に意見したいことがあって、それで参りました」

部屋がしん…としていた。この部屋にいる誰もが王と王子の本来の関係を知っていて、そして更にこんな素っ気ない態度を取らなくてはいけない、それぞれの立場も知っていて　多分それで誰も何も言えずに静まりかえっていた。

「トーレ王子……」

王が静けさを破って言った。

「貴殿が亡命者だと主張しようと、我が国はプリチュ王国の属国であって、ロツフ王の命令を聞く義務がある。そしてロツフ王の命令は貴殿をプリチュ王国に送り返すことゆえ　衛兵！」

えーい！苦勞して（あんまりしてないかな）ここまで来た私達の努力を買って、せめて話ぐらい聞いてくれたっていいじゃないか！と怒る間もなく、壁際に控えていた衛兵が慌てて動きだそうとして槍とか剣とかでガチャガチャ音をたてた。

うー王子の決意は無駄に終わっちゃうんだらうか。くそー何か王子の為に出来ることないかなー、うーうーうー。

ムルーは王子を守るうと身構えた。衛兵はずんずん近付いてくる。

王子は何か言いたそうに王を見つめていた。王は　顔を背けた。

「お待ち下さい、王陛下」

低く、通る声がして、衛兵は歩みを止めた。そして部屋にいた誰もがその声の主の方を見た。その声は、玉座の後ろに控える八人のおじさんのうち、一番端にいた人が発したものだだった。

王はその人を見て、言った。

「リーヴ大臣……？」

その、リーヴ大臣と言われた人は立ち上がると、落ち着いた声で言った。

「意見がある、とおっしゃるのだから、聞くだけでも聞かれてはいかがですか？仮にも　実の親子の間柄なのですから」

おっと。「実の親子」なんて、ほとんど禁句扱いされてること、あっさり言っちゃったよ、この人は。

まわりは当然騒然となる。それでもリーヴ大臣は平然としたもの

で、ゆつたりと椅子に座り直した。うーん、単に鈍感なのか、それとも豪胆なのか……。

王は苦しそうに言った。

「リーヴ大臣。確かにトーレは私の、私達の血をひいている。だが、トーレを我々の子だと認めるわけにはいかない。わかっているだろう?」

認めたら、プリチュが攻めてくる、ということだろうな。それにしても 何だか、最後の「わかっているだろう?」は王子に向かって言ったフシがあったな。

王子もそれを感じ取ったのだろう。王子が答えた。

「ええ、わかっています。だから僕は自分があなた方の息子だという立場を利用して匿ってくれ、とお願ひしにきたではありません。ただ、協力して頂きたいことがあるのです」

王は、しばらく間を置いて、言った。

「リーヴの顔を立てて、そなたをとりあえず旅人として遇そう。言ってみるがよい。協力して欲しいこと、とは?」

王子はごくん、と唾を飲み込むと、ゆっくり口を開けた。

「プリチュの魔王ロツフを倒すのに手を貸して下さい」

## 一、 謁見（後書き）

第一、二章は高校時代に書いていたましたが、第三章は、大体、大学時代に書いていた、と思います。あ、途中からは就職していたかも……。一体何年かけて書いているのか……。

### 三、手紙

部屋中の空気が冷えた、気がした。凍りついたように、人々は動作を止めた。表情さえ固くこわばった。

王の台詞が皆を溶かした。

「それ、は、結局、匿え、というのと同じではないか？」

うん、結果的には同じかも。反旗を翻すということでは。でも。

「いえ、同じではないでしょう、王。匿え、というと王子を守って戦う、ということ。ですが協力しろということからは、王子が自発的に戦うということ。そう解釈してもよいのでしょうね、王子？」

「ええ」

王子は言葉少なに答えた。王はため息をついて言った。

「そなたが戦うと戦うまいと、戦況は大して変わるまい」  
え、そりゃ違うよ、と思う間もなく、口が動いた。

「でも、王子は」

で、言いかけたところで注目された。みんな一気に変な顔をして、王が代表で言った。

「何を言ってるのだ？その、変な……闇色の娘は」

うー、不便だなー翻訳機が要るんだ。で、肩から荷物を下ろしてガサゴソ探す。

探してる間に王子が私の紹介をしてくれた。

「彼女は松浦里菜という人で、プリチュ王国で知り合って、脱走するのに手を貸して頂いたんです」

あー、あんまり正しい紹介とも思えないな。何かその紹介だと私って脱走にすぐ役立つみたいじゃないか。

その後、玉座の後ろのおじさん達がひそひそ話を始めて、それがよく聞こえた。うん、私ってば本当に耳がよくなったな。

そのおじさん達は、こう言っていた。

「そうか、あれが城下の者達が『闇の魔物』と噂していたものか……」

「成程、確かに闇の……」

「魔王ロツフが召喚して、我が国に偵察に来させた魔物ではないのか？」

「うむ、ありうる……」

馬鹿野郎！ありえんわい！ロツフ王が召喚したんだったら、何で王子の脱走に手を貸すんだ！常識で判断しろつつうんだ！

あ、翻訳機、あつたあつた。しかし、私のことを闇の魔物だの何だのと思ってる人たちが、素直に私からこんな得体の知れない物を受け取ってくれるかなあ。と悩んでいたら、それを見透かしたように、王子が手を伸ばして翻訳機を私から取り、そして言った。

「皆様方、これを耳にはめて頂けませんか？プリチュにあつた先人の落とし物ですが、これをするると里菜の言うことがわかるので」  
王子が言つてさえ、みんなひるんでいたけれど、またリーヴ大臣が一人だけ立ち上がって、翻訳機をわざわざ取りに来てくれて、ついでに王と王妃とおじさん達に配ってくれた。そうするとさすがに皆さん渋々それを手に取った。翻訳機の数にも限りがあることだから、衛兵さん達にまでは渡さなかったけど。よし、とにかく話が出るぞ。

「王陛下。王子が紹介してくれたので自己紹介は省きますが 王子が戦列に参加するとしないとでは大きく違います。だって王子はロツフ王を殺せますから。殺すと明言しましたから。 ね？」

王子がコクンと頷いた。

場が、ざわめいた。

「ロツフ王がいなければ或いは……」

「いやしかし、本当に殺せるか？あの王を……」

「……」

その時、どたどたどた　　っという足音が廊下から響いて、入口の所に息急ぎ切って走ってきたらしい兵士が現われた。

「何事だ、騒々しい」

王が言くと、その兵士ははあはあ言いながら口を開いた。

「もっ申し上げますっこちらのみつうら・りなという方に、草原の民の長の第一子、レスティ様から御使者が参られました！」

へ？レスティさんから？

ざわめきが一段と増した。王はすつと顔色を変えると、私に向かって言った。

「リナ、そなたは草原の民の長の第一子と知り合いなのか？」

「え…はあ。知り合いつては知り合いですけど…でも、王子だつてムルーだつてレスティさんと知り合いだよねえ」

何でわざわざ私に使者を送る必要があるんだ？　あ、もしかし

てマントを受け取りにきた、とか。

色々考えていたら、王が言った。

「とにかく、急ぎ、御使者殿をお通し申し上げる！丁重になー！」

それでその兵士は再び走ってそこを去った。しかし……。

「ねーこの異様な歓迎ぶりは何なの？」

とこっそり王子に訊いた。だつて「お通し申し上げる」つて二重敬語じゃないの？何でそんな丁寧な言葉が王様からたかが使者に対して出るわけ？

「　流浪の民は力が強いって前に言いましたよね？」

「うん聞いた。それで？」

「　わかりやすく言つと、普通の流浪の民で、騎士レベルの力を持っています。だから長の息子といえは王族よりも尊く、当然その御使者も……」

「ものすごい待遇を受けるといふわけ？」

「ええ。それに草原の民がこの城下に現われたのは、とても久しぶりな筈で、それも混乱の一因だと思いますが」

うーむ、確かにさっきまで整然と並んでいた衛兵達までざわざわ

ざわ。

しかし、そんなに流浪の民の立場が強いとすると……。

「もしかしてムルーのあの高飛車な態度は、本人の性格ってだけじゃなくて、自分が砂漠の民だという裏付けもあるの？」

王子はクスツと笑って　　お、ハーレ城入って以来初めて笑ったな　　言った。

「ええ多分。でも普通、群れから離れれば流浪の民といえど、権力者に対してはもう少し丁寧な態度を取りますけどね」

ふうん。それにしてもレスティさんが王様からも丁寧語使われる立場とは知らなかった……。

さっきの兵士の案内で、見た覚えのある若い男が部屋に入ってきた。レスティさんの使いともなると、剣を帯びたままで入室できるとは。うーんけっこう身分制度がきっちりしてるんだなあ……。

その人は私達三人の横に立ち止まると、私達に向かって軽く会釈して、それから王に言った。

「ハーレ王シユリア殿、お初にお目にかかる。我は草原の民の長の長子、レスティ様の従者の一人でアインと申す者。主人よりこちらにおわす松浦里菜殿へ急ぎの手紙を預かりし故、謁見中と聞き及びながらも入城させて頂いた次第。失礼は承知の上だが、この手紙、里菜殿に渡させて頂いてよいだろうか」

か、かたい！台詞がかたいぞ！何なんだ、一体！それにレスティさんからの急ぎの手紙って、何だ？

王が答えて、  
「許可しよう」

と言ったので、私はアインさんからくるくる丸められて紐で縛ってあるお手紙を手渡され、それを広げてみたんだけど……、

「王子……、読めない……読んで……」

と情けない声を出す破目に陥った。そりゃ喋れもしない言語を読める筈はないわな。

王子はそれを受け取って一読すると、変な顔をして、それから言った。

「あの……里菜？いいんですか？これ、ここで読み上げても……」

「？うん、内密とかいうんじゃないやなきゃ構わないけど？」

だって読めないんだもん、仕方ないよねえ。

「いえ、別に内密とかってことはないですけど……。じゃ、読みますよ。『言い忘れたが、黒色の髪というのものなかなかいいものだな』

「はあ？」

その場にいる、アインさん以外の誰もが変な顔をした。そりゃそうだ。何考えてるんだ、あの人は？いや、そりゃ髪の毛の毛についてさんざん闇だの何だの言われた後でもあるし、誉められれば嬉しい。でもわざわざ使いを出して、急ぎの手紙で伝達するようなこと？

周囲のざわざわが最高潮に達し、その中で王が私に言った。

「里菜、殿。その手紙を見せて頂けるかな？」

え……？ ざわめきが、途端に止んだ。

私は反射的に手紙を持っている王子の方を見た。王子も私の方を見たので、自然、目が合った。

王子はこの手紙を見せるのか？という意味で私の方を見たんだろ。うし、私も、何せ他人に見せていいものかどうか自分じゃ判断できないから（他に何か書いてあるかもしれないし）その辺を王子に判断してもらおう、と思って王子を見た。そして言った。

「えーっと……見せても構わない…かな？」

王子は軽く首を傾げて、

「里菜が構わないなら、構わないんじゃないんですか？」

と云ってくれたので、私は王子からその手紙を受け取ると王に向かって、

「どうぞ」

と差し出した。ただ、当然、そんな物がじかに渡せる距離にはいなかったから、脇から衛兵がびくびくしながら手紙を受け取りに来て、

それを王に渡しに行った。あー面倒。

王はそれをじつと見ると、

「確かにこの、ラオスのマークの印は草原の民の長の一族のもの……」

と呟いた。言われてみればそんなものが押してあったような気も……。

手紙はさつきと逆の手順で私の手元に帰ってきた。

再び、おじさん達がひそひそ話を始めた。

「それでは本当にあの方のバックには草原の民が……」

おーすごい！私に対する三人称代名詞が「あれ」から「あの方」になった！

「草原の民がついてくれるなら勝てるかも……」

「あの、一国以上の騎馬力と戦闘力を持つ草原の民がつかん……」

「それに、言われてみれば確かに闇色の髪というものも悪くはない」

こんな、無責任なおじさん達のひそひそ話を聞いて、私はあんなおちゃらけた手紙を書いてよこしたレスティさんの意図がわかったような気がした。

多分、レスティさんは、ハーレ王国がどうしても開戦がいやだと突っぱねて、王子が一人でロツフ王と対峙しなくてすむように、ハーレ王国が開戦する気になるように、「私が後ろにいるんだぞ」と暗に示してくれたんだ。

それから、おそらくは私がここで異端視されずにすむように、わざわざ髪のことなんかを誉めてくれたんだ……。思わず胸がじーんとなる程、嬉しい心遣いだ……。

そして確かにレスティさんの思惑どおり、事態は変化していった。

### 三、手紙（後書き）

何故ここでアインさんだったかというところ、2章でレスティさん以外にただ一人、名前が出てきた草原の民だったからだという……。名前を考えるの、苦手なんです！

#### 四、リーヴ大臣

とりあえず用事は終わった、ということ、アインさんが退室した。しばらく泊めてくれるよう、王に頼んでから。

そしてリーヴ大臣が発言した。

「王陛下、トーレ殿の提案を受け入れられたらいかがです？何も永遠にプリチュ王国の植民地でいたいと仰せられはしないでしょうか？」

トーレ殿はプリチュの王を殺せるというし、里菜殿には草原の民の若君がついていらっしやるという。この機を逃したら我が国はいつまでもこのままだと思いますが」

王は後ろを向くと、静かに言った。

「大臣達。今のリーヴ大臣の意見に異論のある者は？」

おじさん達（実は全員、大臣みただなあ、王の台詞からして）は、しん…として、そして誰も何も言わなかった。トーレ王子が期待で顔を紅潮させる。

そして王は前に向き直ると、言った。

「では我が国はトーレ殿に協力して、ロツフ王を倒す」

「待つて下さい！！！」

それはそれまでずっと静かにしていた王妃が言ったものだった。

「王妃……？」

王がそう言った。王妃は目に涙をためて訴えた。

「結局、プリチュ王国に敵対するという意味では、トーレを匿うもトーレに協力するも同じだ、と貴方はおっしゃいましたわね。でしたら認めて下さい！あの子を私達の子だと！同じでしょうか？認めても認めなくても！同じなんでしょう？」

王はちよつと困ったような顔をして、リーヴ大臣に訊いた。

「リーヴ、どう思う？」

王に随分頼りにされているらしいリーヴ大臣は、あっさり答えた。「そうですね、王妃様のおっしゃることはもつともだと思えますが」

王子の瞳が輝いた。

「そう、か。そうだな……」

王はそう呟くと、言った。

「ではトーレ。帰って、くるか？この国に。この、情けない両親の元に」

王子はゆっくりと言った。

「いい、のですか？父上、母上、とお呼びしても？」

王が頷くより先に、王妃が席を立てて走ってきて、すがりつく様にして、王子を抱き締めた。

「トーレ……！」

「は、ははうえ……！」

うーん、感動的。よかつたねえ、王子。

王は一瞬、幸せそうにその妻と子を眺めたけれど、幸せを噛みしめる間もなく、あつちこつちに命令をしまくった。

「衛兵！詰所にいるプリチュの兵士に我が国はプリチュから独立する、と伝えてそのままハーレ王国から追い出せ！それからハーレ国内の各村に触れを出して独立宣言発布を伝えるとともに、十二才以上四十才未満の男子を兵士として集める！」

じゅっじゅうに……！？王子に質問しようとしたら、まだ感動の御対面をやったので、ムルーに訊いた。

「ムルー、何で十二なの！？」

ムルーは何でそんなことを訊くんか？という顔で。

「そりゃ十二で成人するからだろうが。国によって多少の違いはあるが、ハーレ王国じゃ十二だ」

「そっそうすると王子は……」

「ああ、プリチュ王国が十三で成人だったから成人式はしてないが、ハーレでは成人扱いだな」

「……私の世界じゃ二十で成人だけ……」

「二十！？そりゃえらく遅いな。するとお前は……」

「うん、まだ未成年。あ、でもね、うちの世界でもその昔は成

人式は元服つつつて、十いくつかで成人してたらしいけど……」

でも昔はさ、寿命が短かったから、成人が早いのもわかるけど……。あれ、ということはもしかして……。

「ムルー、この人の平均寿命ってどのくらい？」

「あー？そうだな、五十くらいのもんじゃないか？」

うーん、そうか人生五十年なのか……。それじゃ成人が早いのも道理だな。

王に命じられて、衛兵が数人どたばたと部屋から出て行った。

隣で王妃がやっと王子にすぎりつくのをやめた。王が玉座から下りてきて、

「王妃、これから会議ゆえ、トーレにも出席してもらわないと困るのだが」

と言ったからね。

王はムルーにも言った。

「貴殿はずっと王子を守ってくれていたのだな。父として礼を言っ」

「……俺の剣は今まで、プリチュ王を除いては二人にしか捧げられていない。そのうち一人にはもう二度と会えないことになってしまったから、このうえ王子までなくすつもりは、全くない。ただそれだけの、俺自身の事情だ。他人に礼を言われる筋合いではない」

「まあそれはともかく、会議に出席してもらえるかな？あと十分程で用意ができる故」

うーん、会議……。それは私もついていっていいものなのかなあ？私に出るとは王も言っていないしなあ……。でも王子やムルーと離れるというのも何か……。不安だ。

ということを考えていたら、リーヴ大臣が近くまで来ていた。そして大臣に向かって王子が言った。

「叔父上！先程は御助力有難うございました」

へっ叔父上？

「いや、私の力など大した事ではありません。最終的に場を決定したのは王子、貴方の力でしよう？レスティ殿のお力添えにしたって、貴方がレスティ殿のお心を動かされたからでしょうし」

……王子を誉められて、ムルーがうんうん頷いている……。

「でもレスティ殿が動いてくれたのは、里菜の力によるところが大きいというか……」

えー？うーん、まあ何だか妙に気に入ってもらったような気はするけど、でも気に入られたのは、王子もムルーも同じじゃないねえ。「それなら里菜殿を味方に出来たのが王子の功績というべきかも知れませんか。里菜、殿？初めまして。ハーレ王国第八大臣でリーヴと申します」

王子が補足してくれた。

「そして父上の妹の夫君でもありません。ただ、叔母上は随分前に亡くなったので、夫君だった、と言った方が正しいかも知れません」

ああ、だから叔父上なのか。

「初めましてリーヴ大臣。松浦里菜と言います。王子がいなかったら今頃死刑になってた身ですから、王子と知り合えて幸運だったのは、多分私の方なんですけどね。それである、殿も要らないし敬語も要りませんから」

たかがレスティさんの知り合いだってだけで、大臣やら王様にまで敬語使われたら、いたたまれなくて、もう……。

「そう、か？それでは里菜、と呼ばせてもらうことにしよう。

いいですね？陛下」

と、リーヴ大臣が、私の考えてることがわかったかのように、王にまで釘を刺してくれた。うーん、いい人だなあ……。

部屋の入口に衛兵が一人現われて言った。

「申し上げます。会議の間の用意が整いましてございます」

「わかった」

王がそう言うと、大臣連が部屋から出て行った。王子が私の方を見て言った。

「里菜は……どうしてます？」

うーん、どうしてようか……。

そうしたら、それまで王の隣に静かに佇んでいた王妃が言った。

「彼女のことでしたらわたくしが見ていますから、安心して行ってらっしゃい」

王子はにっこり笑って、言った。

「はい、お願いします、母上」

そして王子とムルーが連れ立って会議の間へと向かった。

王が言った。

「では王妃、お客人のことは頼むぞ、丁重に、な」

うーん、王子とムルーはもう受け入れられてるのに、私は客人扱いか……。仕方ないけどねー。囚人扱いとか魔扱いとかよりは格段にマシだし。格段どころか天と地ほども違うか。

「はい、わかりました」

と王妃がにっこり笑って答えると、王は部屋を出て行った。その後ろ姿を見届けてから、王妃は私の方を見て言った。

「じゃあ里菜？行きますようか？」

王妃様にくつついて部屋を出たら、兵士が剣を返してくれようとした。

「あ、どうも」

と言って受け取ろうとしたら、王妃様が綺麗な顔をしかめて、

「まあ！女性にそんなものを持たせてどうするんです？」

と言った。兵士は戸惑ったように、

「えっこの方、女性なんですか!？」

と言った。おい……。

「まあどこを見ているの？立派に女性じゃないの」

「あの、服装は確かに女性ですが、身長と髪型からして、男性が女装なさっているのかと……」

うーん、男の子に間違われたことは何度かあるけど、スカートはいててなお男だと思われたのは初めてだなあ……。まあここじゃ男

の人だつてスカートっぽいのはいてることあるし……。

「確かに里菜は背が高いわね。わたくしより五デイばかり高いかしら？ とにかく、里菜には剣など要りません。どこかに片付けておいてちょうだい。 さ、里菜」

うーん、要らないかなあ、要るような気もするけどなあ……。ま、いいか。この人つてどうも反抗する気が失せる……。

## 五、お風呂

「こちらでございます」

王妃様と一緒にご飯を食べた後、王妃様付の侍女のレチュアさんに案内されたのは、やたらと広い空間。

「あの……？」

こんな広い所で何をしろというのだろう。床運動だろうか。不思議に思っていたら、もう一度レチュアさんが言った。

「こちらが里菜様のお部屋でございます」

思わず絶句。その理由は二つ。一つは、教室位ありそうなこの部屋が、私一人に与えられた部屋らしいってこと。もう一つは……なんで様付けなんだよー、ってこと。

「あのレチュアさん、その、里菜様っていうのをどうにかして頂けませんか？」

翻訳機を渡したので、彼女とは話を通じる。でも、翻訳機してもらっても色々不便だなー。持ってきた翻訳機もそろそろ底をつくし……。そろそろ言葉を覚えないとダメか……。

「そんなわけにはまいりません。里菜様は大切なお客様でいらつしやいますから……。それより里菜様の方こそ私などにそのような敬語をお遣いにならないで下さいまし。私、困ります」

困ると言われてもなー、うーん。とりあえず部屋に入ろう。

しかしつくづく広い部屋だ。これがいわゆる「天蓋付ベッド」か、と思わず感心するような馬鹿でかいベッドが一つ。その向こうには何やら木製の箱。空いた床面には十畳位のサイズの敷物が敷いてある。壁には冬になったら使うんだろう暖炉があって、あとは椅子が二脚、壁際に置いてある。置いてある物が少ないから、余計広々と見えるんだな。

レチュアさんは、左側のカーテンを指して言った。

「そちらにお湯の用意が出来ますから、夕食の前に埃をお落と

し下さい。私はお着替えを調達して参りますので……」  
と言うなり、レチュアさんはドアを閉めて、パタパタと走り去って  
いってしまった……。

えーと。 それじゃあ言われた通り、お風呂でも入るっかな。

パシャン。

湯船に足先をちよつと入れる。 うん適温。

ボチャン。

肩までお湯につかる。

あーお風呂なんて何日ぶりだろ。 うーん、気持ちいいーな。 一回、  
海と川には洗われたけど。

この浴室は、十二畳位はありそうな部屋で、その部屋の真ん中辺  
りに木で出来たカヌー、のような物がでんと置いてあって、つまり  
それが浴槽なわけだ。 給水設備がない所を見ると、どこからかお湯  
を運んできているらしい。 運ぶ人は御苦労なことだ……。

更に言えば、排水設備もなさそうだから、家のお風呂みたいに、  
浴槽の外でお湯をじゃーじゃー流して体を洗うわけにもいかない。  
ここ三階だから、じゃーじゃー流したりしたら、下の人に迷惑が  
かるだろうし。

ということとはつまり、体を洗うのは、この浴槽の中でごしごし体  
をこするのが関の山ということかな。 要するに洋風風呂に近いんだ  
ろう。 でも、私が今まで使ったことのある洋風風呂にはシャワーが  
ついてたけど、ここにはそんなものはない。 どうやって流せばいい  
かなあ……。

そんなことを湯船の中でぼんやりと考えていたら、カーテンが開  
いて、レチュアさんがひよっこりと顔を出した。 驚いた。 銭湯  
でもない、個人用の風呂に入ってる時に覗かれたら、たとえ相手が  
同性でも驚きますって。

レチュアさんは私のそんな様子にも頓着せず、尋ねた。

「里菜様。 お湯かげんはいかがですか？」

訊かれて私は初めて気付いた。翻訳機をはずし忘れていたことに。機械だから、水に入る時ははずすべきだよな、やっぱり。でもはずし忘れるなんて……既にこれ、体の一部になってるなあ……。

とか何とか思いながら、

「はあ、いいです」

と答えると、レチュアさんは持つてきてくれた着替えを台の上に置きながら、再び口を開いた。

「そうですか。ではお体をお洗いたしますけど……」

バチャバチャと水音が立つ程、首を横に振ってお断わりした。

「いえいえ、けっこうです。正しいお風呂の使い方さえ教えて頂ければ、自分で洗えます！是非自分で洗わせて下さい？」

「そうですか？」

と首を傾げてレチュアさんは言った。傾げた拍子に、両脇で三つ編にしてある黄緑色の髪の毛が揺れる。

そしてレチュアさんは、お風呂の使い方を教えてくれた。……石鹸を布にこすりつけて、その布で体をこすることまで。余程、

物知らずだと思われるな、私。そりゃ物知らずですけど！いくら何でも石鹸つけた布で体をこすることぐらいは知ってるんだい！

とにかく訊いたおかげで流すのはどうするのかがわかった。湯船の横においてある木桶のお湯を手桶ですくって、湯船の中にいる時に、体にかけるんだそうだ。

「他に御用はございませんか？」

とにつこり微笑まれて、ちよつと不思議に思ってたことを思い出したんで、訊いてみることにした。

「あのーレチュアさんてさ」

「はい？」

「レチュアさんて私のこと怖くない？魔だと思わないの？私城下でさんざん魔だの闇だの言われたんだけど」

だけどレチュアさんは、王妃様の部屋で初めて会った時からこやかだ。につこり笑って私に飲み物を勧めてくれた……。

「まあ。魔だなんて……思うわけがありません。草原の民の若様が、魔を支援なさる筈がありませんもの」

ああ、そういう理由……。レステイさんの思惑は見事に当たっているらしい。

「それじゃ里菜様、他に御用がないようでしたら、私、お召物を洗濯してこようかと思えますけど……」

あ、洗濯で思い出した。

「あのー、その窓際に置いてある荷物の横のマントなんですけど……」

レチュアさんは私の言ったマントを見ると、すっと顔色を変えた。「この血染めのマントですか？」

「やっぱりその血落ちませんか？レステイさんに借りたマントなんだけど……」

レチュアさんはもつと顔色を変えると叫んだ。

「プテスの若様のですか！？じゃ頑張つて洗つてきます！」

「はあ、すいませんがお願いします」

つて言っただけけど、聞こえなかっただろうなあ……。凄い勢いで部屋から飛び出していったもんなあ。

とりあえず翻訳機外して、髪の毛から足の先までごしごし洗つて。「うーん、さっぱりした」

と体を拭いて服を着ようとして、それで気付いた。

「しまった。レチュアさんたら下着まで洗濯に持ってってくれちゃつたらしい……」

何が「しまった」なのかって、そりゃ赤の他人に下着まで洗ってもらってしまう破目になっちゃったこともあるけど。更に問題なのは、替えのパンツがないという事実なんだよね……。

そもそも、川でずぶぬれになって、服を着替えた時に気付いたことなんだけど、どうやらこの世界には女性用のパンツという物がないらしい。ま、昔は日本でも西洋でもそうだったらしいから、別に驚くようなことでもなかったんだけど。単に私は下着なしで服着る

気にならないってことなんだよね。しょうがないから、来た時に着てたモノを洗って、乾かす間もないから濡れたまま着用してたんだけど……。濡れても愛用してた唯一のモノを持っていかれたとすると、どうしようかなあ……。

考えながらとりあえず、レチュアさんがさつき持ってきてくれた寝間着を着る。うーん、丈が長いぞ。こんな長いから、下着が不要になるんだよな……。うーん、考えてても仕方ない。ないものはないんだ。

翻訳機を再び耳にはめて、カーテンを開けて浴室から出ると、ベッドが目に入った。

お布団という存在が久しぶりで、ついつい魅惑されて掛け布団の上からうつぶせに寝っころがった。

はあ。

思わず、ため息をつく。お風呂に入って、身も心もリラククスして、ついでにお布団なんていう愛らしいものに触れたんで気が緩んだのかもしれない。ここしばらく、忘れてはしなかったけど、忙しくて考えてる暇もなかった疑問が頭に浮かんだ。それは、何で私がここにいるのかってこと。……いかん、涙が出てきたぞ。

ここに来たりしなければ私は人を殺したりせずに済んだのに。……うー、でも自分で決めただから、こんなこと考えちゃいかんよな。考えるのは卑怯だ。殺した人に対しても、……王子に対しても。

でも私、ちゃんと元の世界に戻れるのかなあ……不安だなあ……。

六、＜先人の落とし物＞（前書き）

残酷表現あり、です。夢ですが。

## 六、<先人の落とし物>

バシヤツバシヤツバシヤツ

私が水の中を走ってる。　　ううん、水じゃないな、赤黒い……  
これは血だ。

血の海の中を私が走っている。行く手に兵士が現われる。兵士は首から血を噴き出している。血を噴き出させた剣先は血に濡れている。そしてその剣を持っているのは私の手で、刃を伝って来た血が私の手を濡らす。

「うわっ……」

真っ赤。手が真っ赤。目の前も真っ赤。そして世界が血の色に染まる。

「……！！」

息を呑んで、目を開いた。瞼の裏にはまだ深紅の残像がちらついている。

はああ。

息を吐き出して、両手で両目を覆う。

「悪夢」

でも夢から覚めても現実いっせでないことに変わりはないな。その証拠に、手をどければ天蓋が見える。こんなもん、私んちのベッドにはついてない。

「あれっ」

窓の外が明るい。おまけに小鳥がチュンチュン言ってる。もしかして朝？私、あのまんま眠っちゃったのかあ……。人に仕事を頼んでおきながら……。うーん、すっかり掛け布団まで掛けている……。自分でちゃっかり潜りこんだか、それとも誰かが掛けてくれたのか。  
「やれやれ」

起き上がって伸びをし、サンダルというか、草履みたいなものに足を突っ込む。

するとトントんとノックの音がして、

「はい」

と答えると、レチュアさんが水を張った器と布とかを持って入ってきた。

「おはようございます。ゆうべはよくお休みになれましたか？」

「……すみません……洗濯なんて仕事を押し付けておいて早々に寝てしまうなんて……」

反省。

レチュアさんは持ってきたものを箱（どうやら衣装箱らしい）の上に置きながら、言った。

「いえ、構わないんですけど。レスティ様のマントは、申し訳

ありません、やっぱりダメでした。三人がかりで洗ったんですけど

……」

「そーか、やっぱりダメかー。血って落ちないものだし、生半可な汚れ方じゃなかったからなー。」

「どうもお世話様でした。労力を使わせてしまっでごめんなさい」

「え……謝っていたくようなことでは……。これも私の仕事ですから。あ、あと、他の洗濯物は、夕方には乾くと思います。何か、変わった形の物もありましたけど……」

「あーそりゃー多分下着でしょう。」

「それでは私、朝食を隣室の方にご用意してきますから、里菜様はその間にご洗顔とお着替えをどうぞ」

と言ってレチュアさんは素早く部屋から出て行った。隣室って昨日のお風呂場だよなえ。そうか、風呂場にしては広すぎると思ったら、実は食堂にも化けるんだっただけか。成程。

さてと。洗顔と着替えをしておくように言ってたよね。洗顔ということは、この水の入った器は洗面器だったわけか。よし。

「バチャバチャ。冷たい」。

布で顔を拭くと、顔と同様、頭もすつきりしたような感じがした。ふと耳を澄ますと、戸の外や窓の外がけっこうざわついているのに気が付いた。そうか。今日は閲兵式だって言ってたっけ。きっと朝もはよから皆、準備に駆け回ってたに違いない。

それに比べて私ってば、ガーガー寝てるわ、レチュアさんに世話かけるわ……役立たず、どころかお荷物になってるな……。

どんどん考えがじめじめしていきそうだったので、頭をぶるぶる振って、思考を中断した。ええい！とにかくやれることからやるしかない。まずは、着替えるぞ！

そして、顔を拭いた布と一緒に置いてあつた服に手を伸ばした。

何っーか、着方を間違えようもない服ね。Ｔシャツの丈が長いようなもの。

う。着てみると本当にやたら丈が長いぞ。床上10センチ位しかないじゃないか。しかも裾もあまり広くないからやたら動きにくい。ぶつぶつ文句を言っていると、レチュアさんが戻ってきた。開口一番、彼女は言った。

「やっぱり、丈が短いですねー、里菜様お背が高いから……」

短いー！！じょーだんじやない、学校にこんな丈のスカートはいてったら、間違いなく生活指導の先生にとっつかまるって位、長いぞ！　と思っただけど、同じ型の服を着てるレチュアさんを観察して何も言えなくなった。彼女の裾は床についてるんだよね……。成程、あれが標準なら、床上10センチは短いだろう。

5センチ幅位の帯を腰で締めてから、ふと思いついて、ムルーがプリチュで取ってきてくれたく先人の落とし物>がまとめて入れられる小袋を帯にくくりつけた。　どこで誰と喋る破目になるかしれないから言語翻訳機を身に付けておこうと思っただ次第。……でもくくりつけてみると、意外と重量あるなあ。翻訳機以外の物も入ってるしなあ。

で、着替えが完了すると、レチュアさんが、私を隣室に促しながら言った。

「王子様から御伝言なんですけれど……」『慌しくしていて、朝の御挨拶に行けなくて、申し訳ありません。もし、よろしければ、父上から許可は取っておきましたので、<先人の落とし物>を見に行ってみてください』……とのことです」

おお！それは嬉しい。私が暇だろうと思って、王子ったらわざわざ許可を取ってくれたのだろうか。朝ご飯食べたら行ってみよう」と。

そういうわけで私は、食後早速レチュアさんに案内してもらって、先人の落とし物が保管してあるという地下室に向かった。

朝とはいえ地下は暗いので、左手に灯りを持ってレチュアさんは私を地下へ導いた。

地下といってもプリチュとは違って、牢屋として使われているわけではないらしく、けっこう人があった。籠にいっぱいお芋らしき物を入れて持って歩いている人とかがいるところを見ると、食料貯蔵庫もあるのだろう。

レチュアさんは、そういう人の出入りが激しい部屋の前を通り過ぎて、ずんずん奥へ向かった。次第に人が少なくなってくる。

そして、とうとう突き当たりに行き当たった。その突き当たりにあるドアを指して、レチュアさんが言った。

「ここが保管室です、里菜様」

レチュアさんが借りてきてくれた鍵をその扉の鍵穴に入れて回そうとしたら、やたら堅くて、両手を当てて力一杯回す破目になった。……何年も何年も人が寄り付いてないというのが、すぐわかる堅さだ……。

それでもその内に、なんとか鍵も

ガチャン

と、音を立てて回ってくれた。やれやれ、手が痛くなったぞ。

ひりひりする手をぶるぶると振ってから、扉を開けた。

「うわあ……」

思わず感嘆の声を上げた程に、その部屋は凄かった。

埃も凄かったし、置いてある物の量も凄かったけど、何よりもその雑然さが。ミシン（らしき物）、自転車（らしき物）、電話機（らしき物）、トースター（らしき物）、冷蔵庫（らしき物）……。色々なものが、配置も何も考えず、ただ置いてある。おそらく、用途がわからないから、配置を考え様もなかったんだろう。

いちいち（らしき物）を付けたのは、まるつきりその物に見えるけど、異世界なんだから、実は違う物かもしれない、と思ったからなんだけど……。よくよく見るに、やっぱり「まるつきりその物」のようだ。少なくとも、自転車（らしき物）は間違いなく自転車だ。いやはや。これは本当に、やたら地球と似た文明だったんだなあ。大半の物の用途が想像できるもん。……おや、カメラ。おや、アイロン。

感心して、ふらふら歩き回っていた私の後ろを、レチュアさんは灯りを持ってついてきてくれた。もう既に目は大分暗さに慣れてしまつて、その灯り一つで大分辺りを見回せた。そして見回してるうちに、奥の方に置いてあるミキサーの中に妙な物が入れてあるのに気が付いた。

そこまで歩いて、ミキサーの中からその妙な物を取り出した。しげしげと眺めていると、レチュアさんがそれを照らして言った。

「……石、ですか？それにしては……」

それにしても形が変、とでも言いたかったんじゃないかな。それはロケット型をしていた。

「……弾丸、じゃないかな、これって」

と呟くと、レチュアさんは「？」という顔をした。そりゃわかんないでしょうね、弾丸なんて言われても……。

思い当たる節があつて、帯にくくり付けておいた小袋を手にとつて、中からある物を取り出した。

「なんですか？それは……」

というレチュアさんの問いに、

「んー、……切り札」

と、答えておいた。

そう、「切り札」。うまく使えば、魔王並にこわがってもらえるだろう、と思つて、持ち歩いてきた物。それは、まあいわゆる「銃」という物だった。

当然、日本の一女子高生としては、そんな物と今まで縁があつたわけではない。でも、「切り札」として使う気なら、それなりに使い方を知っておかなくちゃ、と思つて、旅の間に暇を見て、銃口を明後日の方に向けて、色々いじつてみたから、使い方は一応把握したつもり。……まだ、試しでさえ撃つてみたことないけどさ。

とにかく、そんなこんなで身に付けた「いじり方」でガチャガチャとその銃をいじつて、中の弾丸を出してみた。案の定……。

「まあ、同じ物ですわね」

と、レチュアさんが言つた通り、ミキサーの中の物と拳銃の中に入つていた五つの弾丸とは、まるきり同じ物だった。それにしても……、いくら用途がわからないとはいえ、ミキサーの中にこんな物入れておくんじゃない！火薬だぞー。何かのきっかけで、ミキサーが動いちゃつたら……ど、どうなつてたんだらう……、想像するのも怖い……。

しかし、弾丸がこれだけあるということは、試しに撃つてみても代わりがあるということか。五個しか弾がなかったから、試し撃ちさえしてみる気になれなかつたもんなあ。おかげで、弾丸が湿気てるかどうかさえ、わかつてない……。

まあ、この先、この「切り札」が必要になるかどうかは知らないけど。こんな物、使わずに済めばそれに越したことはないと思うけど。……人を害するための文明なんて、発達しないほうがいいもんな。

ゴーン、と遠くで鐘が鳴つた。

この城では、日中、二時間おきに鐘が鳴るんだそうだ。

「もう、十時ですか！？里菜様、申し訳ありません、急いで上にお

上がり頂けますか？王妃様から、十時に里菜様をお部屋の方にお連れするよう、申し付けられていたんです」  
と、レチユアさんが、焦ったように言った。で、私達は、とにかく急いで、王妃様の部屋に向かうことにした。

## 六、＜先人の落とし物＞（後書き）

そんなわけで1 - 8で、里菜が「おっと」とか言っていたり、2 - 2で切り札と言っていたのは銃でした。

あと、スカートが長すぎて生活指導に捕まる、って、今の世の中だと違和感ですかね～。どちらかというと短すぎて捕まる世の中？ま、まあ長すぎても捕まりますよね！？

## 七、閱兵式

午後二時。王が閱兵式だと予告した時間に、私は王妃様と連れ立って城の屋上へ向かった。

城の上からはハーレ城市が見渡せる。昨日、その横を通ってきた広場には、今、人々が整然と並んでいた。

その広場に対面するように、城の上には席がしつらえてあって、王や大臣達、王子は既に席に着いていた。ムルーは王子付き兵士として王子の席の後に立っていた。

王妃様は王の隣の席に着き、私は王子の隣の席に案内された。

……席があるわけね、私には。ムルーは立っているというのに……。やっぱり何だかお客様扱いされてるよなあ。うーん。「お客様」するのは気がひけるんだけど、取り敢えず席に座ろう。

座った私を見るなり、ムルーがぼそつと呟いた。

「馬子にも衣装だな」

悪かったな！　ムルーの台詞で容易に想像できるように、私はドレスなどというものを着せられているのだった……。しくしく。

何が「しくしく」かと言えば、だってねー、凄まじかったんだから！十時に王妃様の部屋に行ってみれば、侍女五人がかりでいきなり風呂にぶちこまれて、上から下まで、痛い程ゴシゴシこすられて……。

そのあと、香油とかいうものを体中塗りたくられて。下着代わりだとかで、布をさらしを巻くかのように上半身にぎゅぎゅう巻き付けられて。

それでもやっぱり、下の下着はないし。ううう……。

それから、薄地のさらさらした、裾が床までつくような服を着せられて（何か、私は背が高いから並のモンでは丈が短いとかで、昨晚、徹夜で侍女さん達が作り直したそうだ……）、その上にやたら細かに模様の織り込まれた根性に入ったハーレ織りのものを着せら

れて……。金糸銀糸で刺繍がしてある見るからに豪華そうな帯を締められて。

それで終わりかと思ったら、髪が短いから見栄えがしないとかで、ベールをかぶせられて。ベールが落ちるつつうんで、薄地の布を額に巻いてあるんだけど、その布には珠をつないだものが巻き付けられてあるという、念の入った洒落ようだ！

おまけに、珠が巻き付けてある布は、もう一つ、帯からスカートにかけてをも飾ってたりなんかして……。えーい、何つつ飾り立てようだ！

あーもう、動きにくいつたら、動きにくいつたら、動きにくいつたら……。

ここまで来るのに、一体どれだけ苦労したことか！普通の歩幅で歩こうとすると、裾を踏ん付けそうになっちゃって。だから小股に小股に、お上品に歩かなくっちゃいけなくって。そんなわけで、日頃自分と無縁な形容動詞「お上品」と格闘しながらここまで来たんだぞ！ええい！全く……。

嘆いていると、王子が言ってくれた。

「似合ってますよ」

……社交辞令でもありがとう、王子……。

せっかく盛装したんだから、小袋を帯にくくり付けたりしないでくれ！と懇願されて、身に付けておこう、と思っていた予備の言語翻訳機その他は、しょうがないからレチュアさんに預けてきた。だけど、王子もムルーも翻訳機を付けっ放しにしてくれたらしく、予備の翻訳機を持ち出さなくても、会話に苦労をしなくてすんだ。良かった良かった。

私が席に着いたことで、全員が揃ったらしく、閲兵式が始まった。

高い笛の音とともにざわめきが止み、辺りがしんとする。

王がすっと立ち上がって、数歩、前進する。座っていた一同も、王と共にザツと立ち上がったので、私も慌てて立ち上がる。

「ハーレの民よ、わが国がプリチュ王国の従国とされて七年……」  
王が話を始める。皆静かにそれを聞いている。

「……長い年月であった。しかし昨日、世継の王子トーレもこの国に戻った……」

この距離でマイクもなくて、広場にいる人達には、王の言葉が聞こえているだろうか、と私はふと疑問に思った。で、下の広場の方に目をやって 息も止まるくらい、ゾツとした。

目！何、あの目！！人々のあの目は何！？私が昨日殺しちゃった人と同じ、虚ろな目！

みんながみんな、生きてるとは思えないような 死んだ魚のような 。 気持ち悪い……。こらえきれず、目を話し続けている王の方に向けた。

う……。何……てこと！今まで気付かなかったけど、王の目だって大差ない！！

王から目をそらすと、人々の目が再び視界に入る。

目、目、目。……。孔雀の羽の模様のような、 生気のない。

気持ち悪い……。気持ち、悪い……。ダメだ、目眩してきた……。意識が、遠退く……。世の中が暗い……。

話し声が聞こえる。

「大丈夫です。多分、お召し物がきつすぎて、気持ち悪くなられたんでしょう。お服は緩めましたから、じきにお気付きになれる筈です」

それって、私のこと？ ま、確かに、さらしもどきはきつすぎて、胃の辺りを圧迫して苦しかったけど、気を失ったのは何もそのせいばかりじゃないと思うぞ。

思い出しても気持ち悪い、あの瞳！あ、またゾクツとした……。

ま、取り敢えず、目を開けよう。

そして少しずつまぶたを開けると、ムルーと緑の髪の女の人がい

た。さっきの声の主は、どうやらこの女の人らしい。

彼女は、私を見て

「お気付きになったようですね。 それではわたくしは王妃様のところにご報告に参りますので、失礼いたします」

と言つと、退出していった。しかし……あーあ。今の彼女も目が死んでるわ……。

周囲を見渡すと、ここは私の部屋、だった。まだ馴染んでないけど、「私の部屋」として与えられた部屋。

上半身を起こそうとしたら、ムルーが、

「無理せんでいい。寝てる」

と言つてくれた。でも、

「うん、ありがと。でも大丈夫だよ」

と言つて、起き上がる。そして、ムルーの目を見た。

ほっ……。ムルーの目は普通だ。正視できる。

「ねームルー。私倒れたの？ 閲兵式はどうなった？ 終わった？」

私の問いに、ムルーは腕組みをして答えてくれた。

「おまえは式の途中で突然倒れた。式は多分、もうすぐ終わるだろう」

「式やってるのに、ムルー、わざわざ私に付き添つてくれたの？」

「ごめん……」

「俺はどーせ、あの手の式は苦手なんだ。抜け出す口実ができて、内心喜んでるんだから気にするな。 王子もご心配なされて

いて、付いていらっしやいたようだったが……」

うん、いくら何でも、王子が閲兵式抜けるわけにはいかないわな。

もう一つ、ムルーに質問してみよう。

「ムルー。ここの人達って何で皆、あんな 死んだような目、してるの？」

ムルーは何で今更そんなことを聞くんだ、と言いたそうな顔をして、

「そりゃ……精神力というか、意志力というか、生命力というか……

…とにかくそういったもんが欠けてるからだろうが」

「……そういうもんで、あんなにはつきり瞳に出ちゃうもの？」

「ああ、わからない奴にはわからないみたいだが、わかる奴にははつきりわかるぞ。　　今までわからなかったのか？おまえの世界ではどうなんだ？」

地球、じゃ、そうだなあ。目が輝く、という表現があるからにはある程度、目の光とかがあってあるんだろうけど、「うわー死んだ目！」とか思うことってなかったよねー。　　地球では、ここ程、精神力が目の輝きに反映されないのかな。それとも、私の知り合いには死んだ目に見える程、精神の弱い人はいないってことかな。

考えていると、コンコンと音がして、王子が入ってきた。

うわっ……まぶしい！

思わず目を細めてしまったくらい、王子の目はまぶしかった。

「里菜……大丈夫ですか？辛い生活だったから、体が弱ってるのかも知れませんが。　　倒れるまで我慢しないで、早く言って下さい。

さつき倒れた時も、ムルーがとっさに支えなかったら、頭を椅子の角にぶつけてましたよ」

そ、それは痛そう……。

「ムルー……お世話様でした……」

と、ムルーに対して言ったけれど、ムルーはそれに対しては何も言わず、王子に向かって言った。

「王子、閲兵式は終了ですか？」

「ん。今さつきね。先発隊は既に国境に向かって出発したよ。僕とムルーは明朝出発の隊だから、そろそろ準備しないと。　　そういうわけなので、里菜。ゆっくり話せる時間は、もうあまりないんです。　　母上が里菜のことを気に入ってたようなので、便宜を図ってくれると思います。また気分が悪くなったり、ほかにも何かあったら母上に相談してください。……本当に、こんな見知らぬ所に連れてきておいて、しかも具合が悪くなっちゃったのに、放ってお

くのはすごく心残りなんですけど……」

またそういう、子供らしくない心配を……。

「あのねえ、王子。具合いの方は、本当にもう全然平気。気にしないで。それに私、見知ってるところから見知らぬ所へ連れてこられたわけじゃないからね。そもそも見知らぬ所へいたんだから、そんなの、王子の気にすることじゃないよ。大体、同じ見知らぬ所でも、あっちにいたら、今頃命がないからねえ、連れてきてもらえて感謝してます、本当に」

と言ったら、マジな顔で王子が言った。

「いえ……感謝するのは僕の方です」

「……って王子が言うから、やたら私皆さんに恩人扱いされてるけどね、一体私が何をしたと言うの。せいぜいがとこ、海から逃げようと提案したくらいでしょ。あれだってもうちよつとで溺れるところだったんだし……」

つらつら思い出してみるに、私ってば本当に役立たずだったような……。自分が無能だと認識するのって……辛いんだよね！。

「それだけってことは、ないですけど。大体、里菜がいなければ、僕はきつと、あそこを出てくるのを未だにためらっていたでしょうから……」

ためらう？どうして？　と思っただけど、訊けなかった。何となく、王子が悲しそうな目をしていたので……。

一寸の空白の刻をおいて、王子が再び口を開いた。

「……武具合わせをしないとイケないので……これで失礼しますね。ゆっくりお見舞いもできなくて申し訳ありませんが……」

「だからもう平気だって。あんまり気を使わないでよ、王子。そんなに苦労性だと、若白髪になるよ」

何だか王子が暗いので、ちよつと軽口をたたいてみた。歳がいつている大臣さんは頭が白かったから、歳とると白髪になるのはこころでも同じに違いない。だからきつと、「若白髪」も存在するだろう。

王子はくすつと笑って、

「それじゃあ失礼します」

と言って、部屋を出ていった。

王子の後ろ姿を見送って、王子が消えていったドアを見つめて、私はほーっとため息をついた。

表情が暗い間でさえも、王子の瞳の輝きは変わらなかった。あの輝きは、感情によるものではなくて。おそらくは、王子の本質そのものだ。

私は、咳くように、ムルーに言った。

「王子は……希望だね、ムルー。ムルーが王子に一目惚れした訳がわかるような気がする……」

死んだような人々の中で、一人だけ、生命という輝きを放つ。まるで太陽のように。

王子がいれば人々も、少しは輝きだすかもしれない。太陽に照らされた惑星が、輝いて見えるように。

「ああ。一目でわかるほど生气に輝いているだろう、王子は。なのに、何だって今まで気付かなかったんだ？」

さあ……。地球で、目で生命力を推し量る習慣がなかったからかな。

「さて、俺もそろそろ準備しに行くが」

ムルーは、ドアに向かって歩きながら、言った。

「どうせ気付いてないんだろうから、教えといてやる。お前の目も、大分、輝いているんだぞ」

「えっ」

と訊き返したんだけど、ムルーはさっさと部屋から出て行ってしまつて、答えてはくれなかった……。

左手首の腕時計を見ると、五時半。結構長い間、倒れてたんだなあ。

あんなに手間暇かけて、閲兵式のために着飾されて、その閲兵式に一分といなかったんだから……。ははは……。笑えるというか、泣

けるというか……。

とにかく、上等そうな服だもんなー。こんな服着て寝てたつてのは、申し訳ない。取り敢えず、今からでも着替えよう。しかし……着替えあるかなー、と考えていると、タイムリーにもレチュアさんがノックをして入ってきた。

「里菜様、おかげんいかがですか？ お着替えをお持ちしましたけど、着替えられますか？」

ほら、タイムリー。

「うん、着替えたいなーと思っていたところ」

で、ベッドから出る。

「それから、昨日の洗濯物が乾きましたので、一緒にお持ちしました」

おーラッキー！下着があるぞ、それなら。

着替えて下着も身につけて。そうしたら、その間にレチュアさんが隣室 昨日、お風呂に入った部屋にご飯を用意しておいてくれた。どうも、隣の部屋は「多目的室」だったらしい。

それでご飯を食べたら、レチュアさんがさつさと片付けてくれて手伝おうにもその間すら与えてくれなかった……。身の置場がない……。

「では御用がありましたらお呼び下さいね」

とレチュアさんは言っつて、部屋から出ていった。

「さて。それじゃ、明日の支度でもしようかな」

と呟いて、私は取り敢えず、プリチュから持ってきた荷物とか、衣装箱の中をあさりだした。

「うーん、どうにかなりそうだなー」

とか、言っていると、

コンコン。

とドアを叩く音がした。あれっ誰だろう。王子かな？

「はい？」

と言っても入って来ないから、ドアを開けると、

「アインさん!？」

昨日、レステイさんからの手紙を持ってきてくれたアインさんがいた。もうとつくに草原に帰っちゃったかと思ってたのに。

「どうかしましたか？」

と訊くと、アインさんは困った顔で言った。

「すみませんが、里菜殿。私には里菜殿の言っていることはわかりかねます」

ああ、そうだった。耳に入ってくる言葉が日本語だからつい普通に喋っちゃうよ……。慌てて、部屋の中から、翻訳機を取って来て渡すと、アインさんはそれをはめてから言った。

「夜分申し訳ありません、里菜殿」

まだ八時くらいいんだけど、夜間照明が発達してないこの世界では、八時はかなり遅いという感覚らしく、アインさんはそう話を切りだした。

「若君からの御伝言です。今晚これから市壁までおいで頂けないかと。若がそこで待っておられます」

「レステイさんが？」

## 七、閱兵式（後書き）

ようやく出てまいりました。かなり重要なこの世界の設定です。精神力のある一なしが多大に影響する世界です。

あ、あと里菜のドレスアップ姿もようやく出てきました。……今後  
も滅多にしません……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5959w/>

---

異世界冒険譚（あなざわーるとあどべんちゃー）

2011年12月10日02時47分発行